赤い薔薇は狂い嗤う

シルバー・ウィング

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤の王レッド・ライダー。

彼には苦楽を共にした一人の仲間がいた。

＊作者が勝手に考えたＩＦのアクセル・ワールドです。１９巻が店頭に並んでるのを見てテンション上がって書きました（それなのにまだ買ってない）。

目次

プロローグ　1
第1話　9
第2話　14
第3話　18
第4話　23
第5話　27
第6話　34
第7話　40
第8話　45
第9話　59

プロローグ

茜色に染まる加速世界。なだらかな丘の上には二つの人影があった。

片やオーソドックスな装甲を持つ、カーボーイハットをかぶった男性型デュエルアバター。

そしてもう片方が、薔薇の花びらを模したようなドレスアーマーを身にまとう、女性型デュエルアバター。

性別も形状も違うそれぞれのデュエルアバターであったが、その二人の装甲はどちらも純色の≪赤≫に染め上げられていた。

「本当にそれでいいのか、ローズ？」

「ええ。聞いたところによると、他の軍団（レギオン）も一人ずつしか上がらないみたいだし。そういう不文律みたいなのから照らし合わせると、最初に私たちの軍団（レギオン）でレベル９に上がるのに相応しいのは――レギオンマスターであるアナタよ、ライダー」

「なんか照れるな、そういうの」

そんなやり取りを交わす二人の間を加速世界の穏やかな風が通り抜けていく。二人はしばし、何の言葉も交わすことなく地平線の向こうに沈みかかった緋色の太陽を見つめていた。

やがて≪ライダー≫と呼ばれたデュエルアバターが、≪ローズ≫と呼んだデュエルアバターに静かに向き直る。

「ありがとうな、ローズ。今まで一緒に戦ってきてくれて。お前は我が軍団（レギオン）の最強の戦士にして最高の親友だ」

差し出された右手をローズは惚けたように見つめ、やがて軽く噴き出す。

「なによ、いきなり。気持ち悪い」

「へっ!?　そ、そうか……？」

容赦のない言葉にたじろぐライダー。ローズはそんなライダーを見て再びおかしそうに笑うが、やがてひどく優しげな眼差しを向けて彼の差し出した右手を握った。

「私もよ。ライダー」

「お……おうっ！」
夕日が沈んでいく地平線を背景に固く繋がった二人の手。その光景は二人がこれまで幾重にも及ぶ戦いを切り抜け、育んできた友情を超えた絆があることを物語っていた。
「んじゃあ、そういうわけで。一足先にならせてもらうわ。――レベル９」
「ええ」
このかけがえのない絆がもうすぐ断ち切られてしまうことを……この時の二人は知る由もなかった。
＋＋＋
「ライダーが……死んだ……？」
一言そう呟き、固まるその姿を赤の軍団（レギオン）≪プロミネンス≫所属のデュエルアバター、ブラッド・レパード――掛居美早は痛々しいまでの思いで見つめていた。しかし、今、こうして感傷に浸っている場合ではないことは百も承知していたので早々に口を開く。
「Ｙ（イエス）。あの七王会議で≪黒の王≫の不意討ちで首を断たれて……」
「……あのルールの通り、ポイントを全損したの？」
「……」
ただ真実を確認するかのごとく問いただしてくる彼女の、無感情なまでのその声音に美早は言葉を失う。
此度、≪純色の七王≫によって開かれた七王会議。その議題は≪レベル９同士に課せられるサドンデスルール≫について。
それはつい先日、加速世界で同時に前人未到のレベル９に到達した七人の王に課せられた悪夢のようなルール。曰くそれは一度でもレベル９同士の戦いで敗れれば、己が持つ≪ブレイン・バースト≫を強制的に永久アンインストールされるということ。つまり一度でも負けてしまえばもう二度とこの加速世界の大地をその足で踏むことができなくなるということだ。
しかもそのサドンデスルールにはまだ先があった。サドンデスがルールの条項その一だとするならば、このルールは条項その二と記されるモノだった。

それはこの加速世界の終焉（エンディング）を指し示すもの。
曰く≪レベル１０に到達した者はこのプログラムの製作者と邂逅し、その意味と究極の目的を知らされる≫ということ。
しかし、レベル１０に到達するのはレベル９のバーストリンカーの首を五人刈り取らなければならないのであり、そのレベル９同士の戦いには前述したとおり、サドンデスルールが課せられる。
つまり加速世界を治める七人の王は戦争か停滞、そのどちらかを選ばなければならなかった。
美早は今日の会議で≪不可侵条約≫が結ばれるだろうと主であるレッド・ライダーから聞いていた。その言葉の意味するところは言い方は悪いかもしれないが、純色の七王は加速世界の終焉（エンディング）を望まず、自らの保身と加速世界の停滞を望んだということだ。
故に美早は驚愕した。会談の途中、黒の王が他の王を裏切り、赤の王の首を落としたという事実を聞いた時。
しかし、何時までも驚愕に浸っているわけにもいかず美早はただちにここプロミネンスNo.２の、言うなればサブリーダーである≪フレイム・ローズ≫に連絡を取ったのだ。
「……パド。今から全レギオンメンバーを招集しなさい」
「……！」
レッド・ローズのその言葉に美早は目を見開く。
純色の≪赤（レッド）≫と、それに極めて近しい≪焔（フレイム）≫を宿していた二人――赤の王レッド・ライダーとその配下フレイム・ローズが固い友情で結ばれているということは、この加速世界においては周知の事実であった。ライダーと恋仲にあったのは紫の王であったが、ローズとの間にはもはや恋愛を超えた絆が存在していた。
すなわちローズは己の半身を失ったようなものなのだ。いつ≪零下現象（ゼロフィル）≫を引き起こしてもおかしくはない状態のはずなのだ。
それなのにも関わらず今、ローズはこうして静かに言葉を発している。なら今、こうして彼女を支えているものとは一体――
「!!」
こちらに背を向け、歩き去っていくローズ。彼女がこちらに背を向

ける時、美早は一瞬だが確かに見た。
赤黒く身体から立ち上る≪過剰光(オーバーレイ)≫を。
それは怒りや悲しみを当に超越した、本当の絶望だった。あまりにもどす黒い、憎しみの焔(ほむら)。
それはこの加速世界ではまだ少数の人間しかその存在を知ることのない≪事情の上書き(オーバーライド)≫――≪心意(インカーネイト)システム≫の暗黒面(ダークサイド)。
いけない――このままでは――――。
しかし足が前に出ない。喉がカラカラに渇き、言葉を発することができない。フレイム・ローズのあまりに濃密な負の心意(オーラ)に美早は完全に屈していた。
「ローズ……」
結局、美早は立ち去っていくローズの後姿をただ見送ることしかできなかった。
＋＋＋
「――レッド・ライダーはたしかに死んだ。≪情報屋≫に聞いたからソレは間違いないわ」
赤の軍団(レギオン)が集会などを行う時に使うローカルネットの仮想空間に設置された檀上に上がったローズの言葉が空間を切り裂く。
瞬間、ブラッド・レパードによって集められ、それまで赤の王の加速世界退場の噂の真偽を確かめあっていた赤の軍団(レギオン)総勢五十六名のバーストリンカーが一斉に静まり返った。
「ロ、ローズ……、やっぱしその噂は本当なのかよ!?」
一人のデュエルアバター――プロミネンス幹部の一人、マーマレード・スナイパーの問いかけに、ローズは静かに頷きを以て答えた。
「そ、そんな……!」
崩れ落ちるスナイパー。その波紋がほかのメンバーにも伝わっていく。その光景は如何にライダーの人望が厚かったかを表していた。
そんな中、ローズの言葉が再度、響き渡る。
「私は今、二つの道を考えているの。一つが今、この場でライダーの跡継ぎを決める。二つ目がこのプロミネンス(レギオン)の解散。……道はこの二つ以外ありえないと、私は考えているわ。――下らない内部抗争を

行いたいというのであれば、話は別だけれど」
――考える時間を上げたいところだけど今、決めて。
広場には沈黙が広がる。ローズの言葉の意味は理解できていた。すなわち、このプロミネンスは今現在、他の五王との不可侵条約を結べてはいない……つまり、早く陣形を立て直さなければ、他の軍団（レギオン）に漬け込む隙を与えてしまうということを。
はじめはポツリ、ポツリと。しばらくして喧噪が辺りを飛び交い始める。
およそ十五分後、軍団（レギオン）が出した答えは存続だった。
「わかったわ。それじゃあ、次は跡取りを決めるけど……誰か候補者はいる？」
「いや、やっぱそれはローズ以外、いないんじゃねーの？」
「え？」
スナイパーのその台詞に周囲も肯定の意を示して頷きを見せる。
ローズは首を傾げた。
「私……？」
「ああ。もとからプロミのNo.2だし、頂点がいなくなったら二番目が繰り上がるのは必然だろ？」
「今だってまとめ役を買って出てくれてるしな」
「赤の軍団（レギオン）で一番強いしねー」
ほかのメンバーも次々に肯定の意見を述べていき、ローズはそんな光景をしばらく呆然と見つめていたが、やがて静かに首を横に振った。
「私には無理よ。レギオンマスターなんて……」
「なっ、どうしてだよ!?」
周囲からもローズほどふさわしい奴はいないだろ？　と疑問の声が上がる。
ローズはしばらく顔を俯け、黙っていたが、やがて静かに口を開いた。
「……私に責任があるのはわかってるわ。仮にもNo.2という立場なら、いざというときは皆を率いていかなければならないということも

……周りから頼られれば、その想いに応えていかなければならないということもわかっている……」
そこまで述べたところで語尾が震えていることに気づき、さらに気づく。ローズの拳がこれ以上ないくらい固く握りしめられ、細かく震えているということに。
一呼吸置いた後、ローズは言葉を吐き出した。
「けれど私は許せない……どうしても許せないのよ……。ライダーの首を狩った黒の王を――≪ブラック・ロータス≫を。……憎しみが何も生まないことはわかっている……それでも私はこの胸の内に湧き起こるこのどす黒い感情（焔）を抑えることができない……抑えられないのよ……」
アナタたちをそんな私の個人的な復讐に巻き込みたくない。そんなローズの無音の想いをレギオンメンバーは読み取った。
レッド・ライダーとフレイム・ローズ。純色の≪赤≫と、それに極めて近い≪焔≫を冠する二人のバーストリンカー。
レギオンメンバーは知っていた。二人がどれだけ互いを想いやり、支えあってこのプロミネンスを導いてきたかを。
ライダーがボケをかましてローズが冷たく突っ込みを入れる。そんな些細なやり取りを交わす二人の姿を見ていると、自然と笑顔がこぼれた。何よりあたたかい気持ちになれた。
そう。このプロミネンスは二つの赤を中心に結束していた一つの家族だったのだ。
あの眩い宝石のような思い出は、もう二度と戻ってはこない――悲しみ……そしてあまりの憎しみに心に傷を負ったローズの、そのあまりに痛々しい立ち姿を見てこの場の全員がそう悟った。
「個人的な復讐なんかじゃねぇよ」
そう言葉を発したのはスナイパーだった。
「俺たちはライダーとローズのやり取りを傍から眺めているのが好きだったんだ。あんな何の気兼ねもなしに言葉を掛け合っててさ、なんか家族みてーって感じでさ。とてもあたたけー気分になれた……」
言うや否やダン！　とスナイパーは壇上に飛び乗り、見上げる全レ

ギオンメンバーに向けて叫ぶ。
「尋常な勝負ならまだしも、あの野郎――黒の王は神聖な会談で汚え手を使ってライダーを狩りやがった！　奴はもう誇り高きバーストリンカーじゃねえただの裏切り者だ！　俺達は、敬愛すべき主（マスター）を討った黒の王を断罪する権利があるっ!!!!!」
「「「オオオオオオオオオッ!!!!!」」」
レギオンメンバーは鬨の咆哮でスナイパーの呼びかけに答える。
その光景を唖然と見つめるローズにスナイパーは告げた。
「俺たちは一心同体。――付き合うぜ、ローズ」

＋＋＋

その後、結局フレイム・ローズは二代目の赤の王となった。
王となったローズはまず最初に配下に向けて告げた。
軍団（レギオン）を抜けたければ、抜けてくれても構わない。
自分を気に入らない者、復讐に巻き込まれたくない者は脱退してくれても構わないと。
しかし、誰一人として抜ける者はいなかった。皆、己のバーストポイントの最後の一ポイントまでローズのために戦い抜くと心に決めていたのだ。
その後、新生・プロミネンスは即座に黒を除く五大軍団（レギオン）と不可侵条約を結び、黒の軍団（レギオン）――≪ネガ・ネビュラス≫所属のバーストリンカーを襲撃していった。
それが後に語り継がれることになる≪赤黒戦争≫の始まりだった。
戦いは壮絶の一言に尽きたが、結果はプロミネンスの圧勝。黒の軍団（レギオン）の幹部集団≪四元素（エレメンツ）≫やその他有力バーストリンカーを狩ることは叶わなかったが、数多の黒の軍団（レギオン）のバーストリンカーがブレイン・バーストを強制アンインストールに追い込まれたという。
そんな戦線の、常に最前線で戦っていたフレイム・ローズの強さは、人として超えてはならない一線を越えてしまったような、まさに≪鬼神≫の如し強さだったという。

こうして黒の軍団（レギオン）ネガ・ネビュラスはたった一日にして加速世界から姿を消したのだった――。

第1話

「あれから二年半……か……」

「ン？」

練馬区にある洋菓子店≪パティスリー・ラ・プラージュ≫。美早に相対する席に座る女性の唐突の呟きに美早は首を微かに傾げる。

すると今まで頬杖を突いて窓の外を行き交う通行人をぼんやりと眺めていた女性は、その艶やかに映える赤い髪を柔らかく揺らしながら美早に微笑みを見せる。

その微笑みはまるで赤い薔薇の蕾が満開に開くその瞬間のように美しく、神秘的な儚さでさえ感じさせた。

「いえ……ちょっと昔のことを思い出してね……。ライダーがいなくなって大変だったけれど……辛かったけれど……美早たちが私に着いてきてくれたから――支えてくれたから、私は今こうしてレギオンマスターとしてあり続けられる。……その事を改めて実感していたのよ」

そして女性は再び窓の外を見やる。その赤い瞳は何かを意識して見ているのではなく、ただ漠然と外の光景を見つめていた。

この真紅の麗人の名は暁月華与。彼女こそが練馬、中野区を支配する赤の軍団（レギオン）≪プロミネンス≫を統治する二代目赤の王フレイム・ローズの現実（リアル）での姿であることを知るバーストリンカーは美早を含め、ほんの一握りしかいない。

その強さはまさに圧倒的の一言に尽きる。この穏やかな面持ちからは想像もつかないほど戦いにおいては苛烈にして冷酷になれる。最愛の友であった先代赤の王レッド・ライダーを失ってからは、その傾向がさらに顕著なものになった。

恐らく現加速世界最強は彼女だと、美早は考えている。一対一の五分（イーブン）の条件であるなら、他の王でさえも彼女には敵わないと。

そして≪心意≫込みの死闘であるなら――。

「わりぃ、遅れた！」

そんな美早の思考は、聞きなれた一人の少女の声によって遮られ

た。見れば、美早たちの座る席に燃えるような真紅の髪をツインテールにまとめた小学校高学年ほどの少女が息を切らしてやってきていた。

少女の姿を見て、華与が嬉しそうに笑う。

「遅いわよ、ニコちゃん。何かあったのか心配しちゃったじゃない」

「す、すみません！」

ぺこりと華与に頭を下げたこの少女の名は上月由仁子。プロミネンスの幹部の一人にして現時点でNo.２の実力を持つハイレベルのバーストリンカーである。

そのデュエルアバターの名は≪スカーレット・レイン≫。≪不動要塞（イモービル・フォートレス）≫、≪鮮血の暴風雨（ブラッディ・ストーム）≫の二つ名を持つ遠距離攻撃一極特化の鬼。

しかし、今でこそプロミネンス幹部の一人である彼女も、二年半前まではしがないミドルレンジのバーストリンカーだったのだ。そんな彼女に秘められた才能を見抜いたのが目の前に座る暁月華与であり、由仁子は自分を引っ張り上げてくれた華与を心の底から慕っていた。

美早の隣に座った由仁子は座るなり美早の脇腹を軽く小突く。

「……なんで迎えに来てくれなかったんだよ！」

「……ＳＲＹ。バイク、メンテに出してた」

「……ンだよ、ソレ！」

尚、今のこのやり取りからわかる通り、この上月由仁子という少女はもはや二重人格と言っていいほど表裏が激しい。美早は華与から、そんな由仁子の所謂お目付け役を頼まれており、何かと行動を共にすることが多いのである。

「ニコちゃんも何か頼んだら？」

「はぁい♪」

……本当に表裏が激しいのである。

由仁子が苺のショートケーキを頼んだところでカフェオレを一口飲んだ華央が口を開いた。

「さて。私が今日アナタたちを呼び出したのは、他でもない例の≪

鴉≫クンの事だけど……≪親≫は誰かわかったのかしら？」
その問いかけに美早と由仁子は気まずく互いの顔を見合わせた。
例の≪鴉≫。それはつい先日、この加速世界に現れた新人バーストリンカーのあだ名である。
デュエルアバター名≪シルバー・クロウ≫。加速世界始まって以来、初となる完全飛行型アバターを体現したバーストリンカーである。
その衝撃の事実は瞬く間に加速世界中に広がっていき、数多のバーストリンカーが自らの軍団（レギオン）やギルドに招き入れようとした。
が、この赤の軍団（プロミネンス）だけは違った。
――杉並エリア……。≪親≫は誰なのかしら？
美早の脳裏によぎる、シルバー・クロウが現れ、間もなくして呟いた何気ないその言葉。その言葉に何とも言い表せない寒気を覚えたのは美早のみではなかった。
なぜならシルバー・クロウが初めてその姿を現したのは杉並区。当然、杉並区内にその現実の身を置いているのだろうが、その杉並区はかつての黒の軍団（レギオン）の領土。
つまり、華与は一つの可能性を考えたのだ。
二年半前の戦いで生死不明だった黒の王が生き延びていた可能性を。
シルバー・クロウの親が黒の王ブラック・ロータスである可能性を。
プロミネンスは密かにシルバー・クロウの親の正体を探った。今回、美早と由仁子が呼び出されたのはその結果報告という訳だが、その報告内容はこの目の前に座る女性の立場からしてみれば、とても思わしくないものだったのだ。
「ローズ……落ち着いて聞いてほしい」
美早は乾いた口を懸命に動かす。
「ここ一週間、軍団（レギオン）総出で情報を収集した結果、シルバー・クロウの親は黒の王……――ブラック・ロータス」
「！」
瞬間、華与の目がこれ以上ないくらい大きく見開かれた。辺りを冷

たい沈黙が支配し、美早と由仁子は痛々しい思いに駆られる――が、次の瞬間、華与は穏やかに頷いた。
「そう」
そして、ゆっくりと椅子の背もたれに体を預ける。その口元にはうっすらと笑みさえ浮かんでいた。
その光景が美早と由仁子には到底信じられなかった。
なぜなら黒の王ブラックロータスは、己の半身であったライダーの首を狩った張本人なのだ。二年半前のあの戦いで誰よりも死んでいて欲しかったまさに宿敵だったはずなのだ。
――なぜ、そんな顔ができる？
まるで新しいおもちゃでも見つけたような、無邪気で――けれども歪な笑み。
耐え切れなくなった由仁子がついに口を開いた。
「どうして……そんなに嬉しそうなんですか……？」
すると華与はきょとんと、一瞬何を言われているのかわからないといったように由仁子を見ると、やがてにっこりと微笑んだ。
「……二年半前のあの日、私はロータスを無限エネミーキルで殺そうとしたの。そっちのほうがロータスに苦痛と絶望を味あわせられると思ってね。けれど一瞬の隙を突かれてその姿を見失って、後悔したの。――ああ、やっぱり自分の手で殺していればよかったって……ね？」
とにかく私は……と華与は窓の外に目を向けて。
「――もう一度、アイツを殺せる」
「「……ッ!!」」
ぞくっ。思わずそう戦慄してしまう程その微笑む姿は罪深く――そして美しかった。
＋＋＋
「なんで……どうしてだよ……」
戦慄く由仁子の掠れた呟きが加速世界の空気の溶けて、消える。
「なんでっ、どうしてなんだよっ！　チェリー!!」
由仁子は涙ながらに吠えた。かつて自分をこの加速世界に導き、共

に戦い抜いてきた≪親≫の変わり果てたその禍々しき姿に向かって。

「――ルゥアアアアッ!!!」

獣のような唸り声と共に狂乱の刃が由仁子に向かい、振り下ろされた。

第2話

「参ったわね……頭が痛いわ」

赤の軍団(レギオン)共有のローカルネット空間にて他のメンバーと待ち合わせ、そこから同時加速した暁月華与ことフレイム・ローズは椅子に座った状態で頭を押さえていた。

空間に設置された円卓にはブラッド・レパードを始めとする≪三獣士(トリプル・レックス)≫や大幹部のマーマレード・スナイパー、さらにはスカーレット・レインの姿がある。

しばし唸っていたローズであったが、やがて口を開く。

「――一応、もう一度、確認しておくわ。まず、破壊されていたはずの≪災禍の鎧≫の復活。その持ち主がウチの軍団(レギオン)のメンバーの一人、≪チェリー・ルーク≫。不可侵条約を破って他の軍団(レギオン)の領土に侵攻、既に何人かのバーストリンカーを永久アンインストールに追い込んでいる……で間違いない？」

ローズの確認に頷いたのはスナイパーだった。

「ああ。≪情報屋≫にも確認したし、間違いねーだろ」

「やっぱり、そう……」

スナイパーの言葉にローズは疲れたかのように重くため息を吐く。

「色々突っ込みたい所は満載だけれど、まぁまずは置いといて、軍団(レギオン)としてやらなきゃいけないことがあるわ」

「≪断罪≫か？」

「ええ……」

裏切りの黒を除く六王が結んだ≪相互不可侵条約≫。他の軍団(レギオン)のバーストリンカーが他の軍団(レギオン)の領土に入ることを原則として禁止するその条約だが、万が一、軍団(レギオン)に所属するバーストリンカーが他の軍団(レギオン)のバーストリンカーを永久アンインストールに追い込んだ場合、同様の仕打ちを本人、もしくはその軍団(レギオン)に所属する好きなバーストリンカーに与えてもよいという条項が存在している。

目には目を、歯には歯をという考えの野蛮な復讐法であるが、その条項が適用されない場合が一つだけあった。

それはその加害者であるバーストリンカーを、その軍団（レギオン）内で粛清――すなわち処刑するということ。
レギオンマスターの持つ特権である≪断罪の一撃（ジャッジメント・ブロー）≫によって、その者のブレイン・バーストを永久アンインストールに処せれば、前記の条項は適用されないのである。
つまりローズは自分の軍団（レギオン）に所属する無関係なバーストリンカーを守るためにチェリー・ルークを断罪しなければならない立場にあるのだ。ローズが頭を痛めている理由はこれである。
いくら条約とはいえ――いくら≪鎧≫によって理性を失い、狂ってしまっているとはいえ、自分に従い、今まで共に戦い抜いてきた仲間を断罪などしたくはない。だが、レギオンマスターとしてローズは私情を挟むわけにはいかない。
「……そろそろ狩場も上になってくる頃ね。――プロミネンス所属のバーストリンカーはチェリー・ルークの現在位置を見つけ次第、私に報告して。言うまでもないことだけど、戦闘は絶対に避けるように。万が一、襲われたら死にもの狂いで逃げるよう伝えて。わかってるとは思うけど念のために中立フィールドに入る際はセーフティーを忘れないように――「ちょっと待ってくれませんか？」
途中でローズの台詞に割り込んだのは、今までひたすら顔を俯け、沈黙を貫いていたレインだった。
「なにかしら、レイン？」
皆の視線が集まる中、立ち上がったレインは自らの胸に手を当てて告げる。
「チェリーの居場所の特定はあたし一人にやらせてくれませんか？もちろん、ちゃんとローズさんには報告しますから」
「でもレイン。たしかルークはアナタの……」
「だからこそです。アイツのことはあたしが一番知ってる。だからこそあたしがなんとかしなくちゃいけないんです……」
それに、とレインは言葉を続ける。
「やはり≪鎧≫を探すのは危険を伴います。下手に大人数を動かさないほうがいい」

「俺は反対だ」
「あ？」
言葉を発したのはスナイパーだった。スナイパーは軍団（レギオン）内の全権を託されているローズに向けて告げる。
「ただでさえチェリー・ルークの処分は緊急を要するんだ。いくらお前がルークを知っているからと言ってもお前一人では時間がかかりすぎる。――他の軍団（レギオン）もいつまでも待ってくれるわけじゃないんだぜ？」
「そうかもしれねぇ――けど!!」
「それにレインはルークの≪子≫だ。下手に私情を挟まねぇ保障がどこにある？」
「ッ！」
沈黙。レインが鋭く息を呑み、その場の全員が言葉を失う。
そう。≪災禍の鎧≫に汚染されたバーストリンカー、チェリー・ルークはこのスカーレット・レインにブレイン・バーストをコピー・インストールした≪親≫なのである。先ほどローズがレインに告げようとした言葉もその事についてである。
ローズは原初にブレイン・バーストを配布されたいわゆる≪オリジネーター≫故、親がいない。しかし、己の半身を失う悲しみは知っている。
だからこそレインの気持ちはわかる。≪鎧≫の支配下からルークを救いたいのだろう。そのためにもまず自分一人でルークを探し出したい。他人に見つけられ、自分はなにもできないままローズに断罪されたくないのであろう。
だが、スナイパーの意見がもっともであることもわかる。他の軍団（レギオン）はいつまでも待ってはくれない。早くしなければ、全く罪のないバーストリンカーが犠牲になってしまうのだ。
どうするか。頭を捻らせていると、不意にブラッド・レパードが口を開く。
「ローズ、お願いが」
「なに？」

「一週間だけ彼女に時間を与えてあげてほしい。一週間経ってもレインがルークの情報を入手できなければ他のメンバーも動かせばいい」
「パド……」
レインがレパードをじっと見つめる。
ローズはしばらく考えるそぶりを見せた後、やがてゆっくりと頷いた。
「――いいわ。一週間だけ時間をあげる。皆もそれでいい？」
「ローズの決定なら文句はねーよ」
反対していたスナイパーを始め、≪三獣士（トリプル・レックス）≫も肯定した。
「あ、ありがとうございます！」
行きつく先には絶望しかないのかもしれない。
それでも猶予を与えてくれた皆にレインは感謝の想いを伝えられずにはいられなかった。

第3話

「はぁ……」

加速世界初の飛行型デュエルアバターとして一時の加速世界の注目をさらった≪シルバー・クロウ≫こと有田春雪は重々しくため息を吐いた。

その理由は単純明快、ここ最近の対戦勝率の低下である。そしてその勝率低下の原因が、自身の遠隔狙撃回避率の圧倒的低さ。

このままじゃ……このままじゃ……先輩にも見捨てられてしまう……。

ハルユキの脳裏に敬愛する剣の主の失望の表情がよぎる。今まではハルユキが無様な失敗を犯したとしても、怒るどころか笑って励ましてくれさえした。だが、その失敗を続けていればやがては愛想を尽かされてしまうということをハルユキは理解していた。

そして自分を地獄のような環境から文字通り、救い出してくれた剣の主――黒雪姫から見捨てられるということは考えたくもないことだった。

強くなりたい。ハルユキはそう強く願っている。回避率を上げるためにアプリを組んで特訓もしている。それなのに回避率は一向に上昇しない。強くなれない。

僕は……どうすれば……。

それでも尚、どうすれば強くなれるか考え続けていた学校帰りのハルユキは自宅マンションの扉のロックを解除した。

「お帰りなさい、お兄ちゃん！」

「……だいま……」

靴を脱ぎ、不明瞭な声で応じてから一歩、二歩、三歩。――ん？

何かがおかしい。

ハルユキの認識では、この有田春雪なる人間は生まれてから今日までの十三年と十か月、一貫して一人っ子だったはずである。それなのに家に入るなり可愛らしい声でオカエリナサイ、オニイチャン？

なに、≪妹≫ってどんな都市伝説？

おまけに何やら甘く香ばしい匂いまで漂ってくる。これは幻臭でいいのだろうか。
肩から鞄を落とし、ふらふらと覚束ない足取りでリビングに向かい――ハルユキは見た。
普段は決して使われることのないキッチンスペースで動き回るエプロン姿の女の子の姿を。
なにコレ。どっから来た天使（エンジェル）？
思考能力を消失し、ただ眼前に広がる視覚情報を保存することしかできないハルユキに女の子はちらっと視線を向けると可愛らしく微笑む。
「今、クッキーが焼けるから、お手洗いして待っててくださいね、お兄ちゃん」
「うわっ!?」
今更ながらに悲鳴を上げたハルユキは、丸い体をリビングに繋がる扉に隠し、おそるおそる顔の上半分だけをそっと突き出す。
落ち着け、落ち着け、落ち着け！
全然落ち着いていないハルユキであったが、それでも懸命に思考を凝らし、あれが幻覚でもニューロリンカーに仕掛けられた悪意あるプログラムによって作られた偽物（ポリゴン）でもないことを悟る。
じゃあなぜ、ここに本物の女の子が存在しているのか。必然的に浮かぶ単純にして最大の疑問を前にハルユキはすぐさま回れ右。洗面台に向かう。
まままままずは言われた通り、手を洗ってうがいをしよう。ははは話はそれからだ。
早くも思考を放棄したハルユキであった。
＋＋＋
「えっと……ハトコのサイトウトモコちゃんでいいんだよ……ね？」
「はい。ふつつか者ですが、三日間よろしくお願いします」
あれから女の子の焼いたクッキーを機械的に平らげ（味はとても美味しかったが）、女の子の淹れてくれた紅茶をズズッとすすったとこ

ろでようやく思考するという行為を取り戻したハルユキは、女の子――サイトウトモコちゃんから詳しい話を聞いた。
とはいっても、ただトモコの父親が海外に出張に行ってしまい、その間は一人では危ないということでハルユキの家が預かることになったというだけなのだが。
一通りの自己紹介が終わったところで部屋には沈黙が広がる。話題がない。
いけないいけない。トモコちゃんは小学五年生なんだぞ。僕がリードしてあげないと……。
見た目は明るく何事もないように振る舞っているように見えるかもしれないが、環境の違う部屋でほぼ他人に近い男と一緒に三日間暮らすというのはとてつもなく不安であろう。
そう考え、ハルユキは口を開く。
「……じ、じゃあ、その、えーと……これからどうする？　げげ、ゲームでもする？　山ほどあるよ、四十年前くらいのからごっそり……」
言ってしまってからその大半が血みどろ地獄絵図系であることを思い出す。
しかし幸い、トモコは微笑んだまま首を軽く振った。
「あの、あたし、ゲームあんまりやらなくて。完全（フル）ダイブがちょっと苦手で……」
言われて、ハルユキはブラウスのボタンが一番上まできっちり止められた細い首に現代の必須生活ツールであるニューロリンカーが存在しないことに今更ながらに気づく。グローバルネットに繋ぐニューロリンカーはあらゆる犯罪の温床なので、幼いうちは買い与えない家も少なからず存在する。トモコの家もその分類に当てはまるのだろう。
「じ、じゃあ、映画でも見る？　２Ｄ画面のヤツでも面白いのはあるよ」
だがトモコは今度も小さくかぶりを振ると、恥ずかしそうに言った。
「あの……それより、お話しませんか？　お兄ちゃんの中学のこと

とか色々教えてほしいな」
そう言ってハルユキの座るソファーにちょこんと座りこんでくる女の子はどこの天使（エンジェル）か。
ずきゅーん、という効果音が脳内に響いた気がしたハルユキであった。

＋＋＋

有田家のリビングにて由仁子はソファーに座ったまま動かずにいた。春雪（ターゲット）は現在、入浴している。
敬愛する赤の王から与えられた≪執行猶予期間≫。由仁子はどうにかしてその間に親であるチェリー・ルークを≪鎧≫の呪いから解放したいと考え、そして行動を起こしていた。
たとえこれまでに≪鎧≫の呪いから解放された者が人もいなかったということを……そしておそらくはチェリー・ルークだけが≪特別≫などということはないだろうということを、頭の中では理解していたとしても――。
一回、由仁子が≪鎧≫に憑かれたチェリー・ルークと戦った時はその機動力の高さにとにかく驚かされた。自分の砲撃は全て避けられ、逆にヒットアンドウェイ戦法に持ち込まれ、結局はタイムアップ負けに喫してしまった。
ルークを救うにはまずその機動力を奪わなければならない。
その考えに至った由仁子であったが、同時に由仁子は如何にしてルークの機動力を奪うかという問題に直面した。
マーマレード・スナイパーの≪超精密遠距離狙撃≫、フレイム・ローズの≪超高熱火炎攻撃≫であるならおそらくそれが可能であろう。しかし、この二人に頼むということはすなわちチェリー・ルークの≪断罪≫を意味している。ただでさえ時間はないのだ、断罪するチャンスが目の前にあるのだとしたら彼女たちは私情に流されることなく、迷わずチェリー・ルークを断罪するであろう。
身内のバーストリンカーに協力を頼むわけにはいかない。その考

えに至った由仁子はここ最近加速世界に登場した≪白銀の鴉≫に目を付けた。≪超長距離ジャンプ≫を保有するルークを抑えるに≪飛行≫アビリティを持つシルバー・クロウほど優れた適格者はいない。実力も由仁子と比べて格下であり、≪リアル≫さえ割ってしまえば力づくで言うことを聞かせられる自信があった。

しかし、大きな障害が一つある。シルバー・クロウは復活した黒の軍団（レギオン）に所属している――どころかフレイム・ローズ、そしてプロミネンスの宿敵である黒の王の子であるのだ。協力を申し込むということはすなわち、軍団（レギオン）を――敬愛する赤の王を裏切ることになるのだ。

裏切りたくねぇ……裏切りたくねぇよ！

自分のアバターに限界を感じ、行き詰っていた自分を拾い上げ、導いてくれたフレイム・ローズを。初めてリアルで会った時、緊張しまくっていた自分に向けて笑いかけてくれたあの優しい眼差しは今でも鮮明に思い出せる。

だけどルークはあたしの≪親≫なんだ！

由仁子は覚悟を決めていた。たとえ赤の王を裏切ることになろうとも、自分はルークを救い出すと。一パーセントでもその可能性があるのなら、主の意に背くことになろうとも、その可能性に賭けてやると。

≪ソーシャル・エンジニアリング≫――他人に成り済まし、オフラインでセキュリティを破るハッキングを決行し、シルバー・クロウのリアル――有田春雪という名の少年に接触することに成功した由仁子の計画はいよいよ大詰めを迎えようとしていた。

やるしかねぇ。やるしかねぇんだ……。

由仁子は計画の総仕上げを行うべくソファーから立ち上がった。まさかそのハルユキに自分の正体がサイトウトモコではないと見破られてることなど思いもせずに――。

第４話

「トモコちゃん……君、新手のバーストリンカーでしょ？」
「えっ……。ばーすと……なんですか、ソレ？」
ハルユキの指摘にトモコが一瞬といえども驚愕と焦りをみせたことをハルユキは見逃さなかった。
ああ、やっぱりねー。
トモコとの話をひとまず終え、風呂に入ったハルユキはニューロリンカーで母親の実家のホームサーバーにアクセスし、そのデータベースからハトコのサイトウトモコちゃんなる人物が映る写真を探してみた。ハルユキは突如、妹と三日間一緒に暮らすという一大レアイベントを素直に受け止め、楽しめるほど素直な育て方を受けてはいない。
その途中でバスタオル一枚姿のトモコがバスルームに乱入してくるというハプニングがあり、パニックに陥ったが、結果ハルユキは確信するに至った。
この子、サイトウトモコちゃんじゃないわー、と。
写真と見比べてみてまるで違う。若干ハーフがかった目の前の女の子と写真に写る純和風の顔立ちのトモコ。いくら写真を撮った頃と比べて成長したにせよ、その血筋までは変えられないはず。ぶっちゃけ、写真の女の子がここまでかわいくなるなんて到底思えないし。
そして、この女の子が自分と同じバーストリンカーだと思い至った理由が――
「日焼け」
「え？」
「首のとこ、綺麗に日焼け跡がついているよ。僕と同じくらい。なかなかそこまでは生まれた直後から常時装着していないとならないよ。……ニューロリンカーを」
それに実家の写真と比べても、明らかに君は違うしと言葉を続ける。

トモコを偽る女の子はぴくぴく頬を引き攣らせ、実に複雑な表情を浮かべた――かと思うとこれまでの純朴さの欠片も感じられない不貞腐れたような渋面に固定した。
「ちっ」
バスタオルの両腰に手をあて、強烈な舌打ちを鳴らす。
「ここンチのアルバムは確認したのになぁ。まさか、実家のアルバムまで掘り返すとはアンタ、疑り深すぎンぜ」
「ははっ……どーも」
素直な育て方をされてなくてよかったーとこの時ばかりはその事に感謝しつつハルユキは口を開く。
「まぁ、君がこんなことしたのも僕を踏み台に≪あの人≫にもハッキングを仕掛けるためなんだろうけど、甘いよ。あの人だったら一目見ただけで気づける。まぁ、バーストリンカーとして正面から挑んでも勝てないって思う気持ちはわかるけど。……相手があの≪ブラック・ロータス≫なんだから……」
早く出て行ってくれないかなーと思いながらぶちぶちとそこまで言い終えた――その瞬間。
女の子の気配が再び激変した。……具体的にはお怒りの方向に。
「――おいコラ、今なんつった？」
「……へ？　だ、だから、正面から挑んでも……」
「勝てない？　あたしが？　だからコソコソこんなめんどいリアルハックを仕掛けたってか？」
――違うの？
目線でそう問いかけたハルユキに、女の子は頭からタオルをむしりとると床に叩き付け、人差し指をハルユキに突き付けた。
「舐めんなよ、コラ！　黒の王なんざ、勝とうと思えばいくらでも勝ってやるわ！　――アンタにはまずこの≪スカーレット・レイン≫様の実力をタップリ味あわせることから始めてやる！」
ニューロリンカー取ってくるから大人しく待ってろよ！　と言い残し、その場を立ち去ろうとし――風呂場の出入り口の縁に足を引っ掛け、転ぶ。

「ぶへっ!?」
転んだ拍子にパラリと体に巻かれていたタオルが取れてしまい――
「うわあああああああああああ!?」
「うぎゃ――――――!?」
見てしまった。女の子の全裸を。背面だが。
「……ぶっ殺す」
首だけこちらに向け、ぼそりと告げると女の子はやけになったのかバスタオルを拾わずにそのままリビングに向かっていった。
あれは不可抗力だろおおおおおおっ！
内心絶叫しつつ、ハルユキはどうにか思考を開始する。
スカーレット・レイン。聞き覚えはない。が、おそらく六大軍団（レギオン）のいずれかに属する刺客だ。言動からしてたぶんこの後対戦を吹っ掛けてくる。
ニューロリンカーを外せば対戦を回避することは可能である。だが、刺客であるならば今後本格的に戦っていくことになるので、情報を集めたほうがいい。レベル４のハルユキならたとえ負けたとしても、ポイントはそこまで減らないはず。
しばし考え、ハルユキは呟く。
「コマンド、ボイスコール、ナンバーゼロワン」
途端、目の前に【登録アドレス〇一に音声通話を発信します。いいですか？】というホロダイアログが浮かぶ。即座にイエス。
コール二回で相手が出た。
『どうしたハルユキ君。こんな時間に』
しっとりと滑らかでつ音楽的な抑揚のあるその声の背景にちゃぷんという水音が重なる。
あー、先輩もお風呂かなぁ……などと一瞬考えてから、ハルユキはコールの相手――加速世界に七人しかいないとされるレベル９のバーストリンカーのうちの一人にしてハルユキの≪親≫である黒の王ブラック・ロータスこと黒雪姫に話しかけた。
「遅くにすみません。ちょっと、教えてほしいことがあって」

『ほう、なんだ？』
「その、先輩は≪スカーレット・レイン≫というバーストリンカーを知っていますか？」
質問の答えは少々長めの沈黙だった。
「……あ、あの、どうしたんですか？」
『……いや、すまん。それは本気で訊いているのだろうな？』
「本気って……もちろんそうです。こんな時間に悪戯電話なんてしませんよ」
『そうか。ううむ、これは私の手抜かりかな。通称ばかり使って名前を教えたことはなかったか。しかしシルバー・クロウ、キミも少々不勉強だぞ？』
「え？」
首を傾げたハルユキの聴覚に、どたどたと廊下を走ってくる女の子の足音が重なり、黒雪姫の涼やかな声が響いた。
「――スカーレット・レイン。そいつはかの≪不動要塞（イモービル・フォートレス）≫、≪鮮血の暴風雨（ブラッディ・ストーム）≫の二つ名を持つ、六大軍団（レギオン）の一角……≪プロミネンス≫の現実力№２じゃないか」
「はい？」
目を丸くして固まるハルユキの視界に再び女の子が姿を現した。よほど怒り心頭なのか、下着姿だ。
そしてその首元には真紅の輝き。
にいっと凶暴な笑みを見せた女の子は可憐かつ威圧感たっぷりの声で叫んだ。
「バースト・リンク!!」

第５話

「――≪ヒート・ブラスト・サチュレーション≫!!」
「ぬっ、ひえええええええっ!!」
「――≪ヘイルストーム・ドミネーション≫!!」
「しょえええええええええええっ!?」
何これ何これ何これ!?
弾雨の嵐を全力飛行で回避しながらハルユキは頭の中で叫び続ける。
スカーレット・レインは遠距離の赤に属される紅（スカーレット）という色からもわかる通り、遠距離射撃の鬼だった。始めは弱々しい少女アバターだったのにも関わらず、まさに≪要塞≫と言うべき砲台を虚空より召喚した途端、その弱々しいイメージは完膚なきまでに消し飛ばされた。
ハルユキは迫り来る極太のレーザーを避けながら、ミサイルの爆発音に負けない大声で叫ぶ。
「き、君のコレでNo.2なのォオオオオオオ!!?」
レベルこそ８であるが、その威圧感、この火力はレベル９と比べても然程の遜色は無いように思えた。黒の王なんざ、勝とうと思えばいくらでも勝ってやるわ！　と啖呵を切ったのもその大火力を見た今となっては頷ける。
「ああ、そうさ！　たしかにあたしはめちゃくちゃ強い。たとえレベル９の王サマ相手でも条件さえ揃えれりゃ勝てる。――けどなァ！　そんな条件を揃えようが揃えまいがあたしの主（赤の王）の強さはあたしを凌駕すんだよ!!」
マジで!?
赤の王。それはつまり、このスカーレット・レインが所属する赤の軍団（レギオン）プロミネンスのレギオンマスター。
立場的に見れば他の五王や黒雪姫と同じということになるが、このスカーレット・レインにここまで言わせる赤の王とは一体……。
「無駄話は終わりだ。――さぁ、フィナーレと行こうか！　≪スパ

イラル・エンド・フェニックス≫!!」
「っ!?」
考え事をしていたハルユキは反応を遅らせてしまう。
モーションは≪ヒートブラスト・サチュレーション≫に似ていた。だが、二つの主砲から放たれた赤いレーザーは螺旋状に絡まり合いながら進んでいき、やがて一つの巨大な不死鳥（フェニックス）の形を造り出した。
「え、あ、ちょっと……」
あまりに壮大な光景に空中で腰を抜かしたハルユキにお構いなしにクェエエエエ!!　と嘶いた不死鳥（フェニックス）はそのままハルユキに向かって羽ばたいていき、命中した途端巨大な火柱となってハルユキのＨＰを一瞬でかき消した。
＋＋＋
「――ってなことがありまして、スカーレット・レインは対戦の後、僕に先輩をリアルで会わせることを要求してきたんです」
「……」
昼休み。梅郷中のラウンジにてハルユキがそう話を締めくくると、黒雪姫は固く握った拳を宙に浮かせ――。
この馬鹿者！　ドガチャーン！
という怒声とテーブルひっぱたきは危ういところで発生しなかった。その理由はラウンジに他の生徒が数人、昼食のトレイを抱えながら入ってきたからだ。
彼はハルユキと黒雪姫にちらりと視線を向けると、見慣れた光景ながらもどうにも信じられないといったいつもの表情を浮かべ、少し離れたテーブルに席を占めた。
黒雪姫は尚もしばらくやり場のない拳を浮かせたまま深呼吸を繰り返していたが、やがてその手をすとんと卓上に落とす。
「何はともはや……最初に見たとき気づけと言いたいのはやまやまだが……たしかにそんな体当たりなソーシャル・エンジニアリングを、しかも大レギオンの≪大幹部≫が仕掛けてくるなんぞ、想像の埒外ではあるな……」
「ね、ねー、ですよねー」

黒雪姫の大噴火が回避されたことに胸を撫で下ろしながらも、ハルユキはこくこく首を動かした。
「ま、怪我の功名といった面もないこともないしな。レベル８とはいえスカーレット・レインは≪王≫と比べても遜色は無い実力を持つと言われている。それはバーストポイントをいくら積んでも買えない貴重な体験だ。……どうだった、≪プロミネンス≫の№２は」
「無茶苦茶ですよ。一撃で都庁を吹っ飛ばして……」
あの超絶的火力を思い出し、ハルユキはぶるっと身を震わせる。それを見て、黒雪姫はふふっと笑う。
「それこそは≪一極特化アビリティ≫の威力だよ。スカーレット・レインはすべてのレベルアップボーナスを遠距離火力の強化につぎ込んだと聞くからな。そうだ……キミとの対戦で、スカーレット・レインは動いたかい？」
「へ？」
一瞬質問の意味を理解し損ね、ぱちくりと瞬きをする。そこからようやく昨夜の戦闘を思い返し、告げる。
「ええと……動いてません。なんかスッゴイ鳥みたいな必殺技を受けちゃって、呆気なくやられちゃいました」
すると黒雪姫はぱん、と手を鳴らすと感心したように言った。
「ほう、それは大したものだ！　スカーレット・レインに≪フェニックス≫を使わせるとはな！」
「≪フェニックス≫？」
「スカーレット・レイン最強の必殺技――≪スパイラル・エンド・フェニックス≫。通称≪フェニックス≫は、追尾性を備えた極大威力の砲撃として知られている。これといった対抗手段も未だ見つけられておらず、加速世界における最強クラスの必殺技の一つだ。……そもそも彼女の場合、それを使う以前に勝ててしまうのだから、早々お目にかかることのない代物なんだぞ」
「はぁ」
いまいちピンと来ていないハルユキに黒雪姫は言葉を続ける。
「つまり、ハルユキ君は彼女にそれを使わせるだけの実力を証明し

てみせたということだ。それはある意味、彼女を動かすことよりも難しい。誇りを持っていいぞ」
「はあ……」
今一度、昨夜の戦いを思い返してみるが、ハルユキはただスカーレット・レインの砲撃にいいように追いやられていただけなので、やはり今一つピンと来ない。
そんなハルユキを見て、黒雪姫は苦笑した。
「ま、まぁ、それにしても、そんなスカーレット・レインに自分より強いと認めさせる≪赤の王≫はどんだけ凄いんでしょうね。なんというか、もう想像もつきませんよ」
「……！」
≪赤の王≫。その単語を聞いた瞬間、黒雪姫の顔が強張ったのをハルユキは見逃さなかった。
「先輩……？」
さっと血の気が失せ、青ざめたその表情はあまりにも痛々しかった。が、ハルユキが何か言葉をかける前に黒雪姫は小さく首を振ると口を開く。
「そうか。ハルユキ君にはまだ教えていなかったな。二代目≪赤の王≫の名は」
そこに来てハルユキは二年半前、黒雪姫が≪七王会議≫にて赤の王≪レッド・ライダー≫の首を狩っていた事実を思い出した。
ばかばか僕のばかちんが～！
黒雪姫が己の確固たる目的のとはいえ、不意討ちでライダーの首を落としたことを公開しているということをハルユキは知っていたはずだった。
知っていたはずなのにも関わらず、不用意な台詞を述べてしまった自分が恨めしい。
自己嫌悪に陥るハルユキを余所に黒雪姫は言った。
「二代目赤の王の名は≪フレイム・ローズ≫。≪炎熱地獄（フレイムズ・オブ・ヘル）≫、≪世界焼却（ワールド・バーン）≫、その他多くの二つ名を持つ、レベル９のバーストリンカーだ」

「炎の(フレイム)……薔薇(ローズ)……」
黒雪姫は遠い日の記憶を思い出すかのように目を細める。
「≪フレイム・ローズ≫はライダーが王の時のプロミネンスのNo.2だったんだ。軍団(レギオン)きっての武闘派で、実質的な戦闘力はライダーを勝ると言われていた……」
「まじすか……」
王より強かったとかどんだけーとハルユキは内心で悲鳴を上げる。
黒雪姫はそんなハルユキを見て軽く微笑むと、表情を戻して言った。
「二人の絆はとてつもなく強固なものでな……ライダーと恋仲にあったのは≪紫の王≫であったが、真の意味で深いつながりを持っていたのは≪フレイム・ローズ≫だった。二人の息の合った掛け合いは見ものでな、≪紫の王≫はいつもやきもちしていたよ……――私はそんな二人の尊い絆をこの両の刃で真っ二つに断ち切ったのだ」
そこに来て、懐かしむような黒雪姫の表情が一転し、声のトーンが落ちる。
「……私がライダーの首を落としたと知ったローズはマスターを失い、混乱の極みにあったであろう軍団(レギオン)を瞬く間にまとめあげ、ほかの≪五王≫と≪不可侵条約≫を結ぶや否や、プロミネンスの大部隊を率いてネガ・ネビュラスに攻め入ってきた。プロミネンスはライダーの仇である裏切者――つまりは私を討つ、という共通の目的に結束していてな。……壮絶な戦いの果てにネガ・ネビュラスは完膚なきまでに敗北。数多のメンバーがブレイン・バーストを強制アンインストールに追い込まれ、加速世界から退場していった……」
「……」
もはやハルユキは絶句するしかなかった。黒雪姫もまた光を失った目で顔を俯けている。
グシャと髪の毛を鷲掴みにした黒雪姫は言葉を続ける。
「……戦いの最後で私は≪フレイム・ローズ≫と対峙したんだ……彼女は怒りを越えたあらん限りの憎しみを私にぶつけてきた……私を少しでもいたぶり、苦しみを与えようと何度も何度も私を怪物の巣

に投げ込み、嬲り殺した。なんとか隙を見て逃げ出すことはできたが、もしあの時、彼女が私をいたぶらず、本気で殺しに来ていたら私は……っ!!」

黒雪姫はその華奢な体を細かく震わせていた。

ハルユキは衝撃を受けていた。肩を震わせる黒雪姫にではない。全てを切り裂く黒雪姫の強さはまさに次元が違うのだ。その黒雪姫をここまで恐怖させた二代目赤の王（フレイム・ローズ）の実力は尋常なものではない。

遠い。レベル１０は――加速世界の終焉（エンディング）はとてつもなく遠いとハルユキは感じた。ちっぽけな自分が……黒雪姫を守れるだけの強さを持たない自分があまりに悔しかった。

なけなしの勇気を振り絞ってハルユキは冷たくなった黒雪姫の手を両手でそっと包み込む。

「先輩……強くなります……僕……今はまだ全然よわよわですけど、いつか先輩を守れるくらい強くなって見せます。だから……」

今のハルユキに出来ることはこれが精いっぱいだった。遠隔狙撃にいいように撃ち落とされる今の《シルバー・クロウ》では――。

ハルユキの想いが通じたのかは定かではないが、青ざめていた黒雪姫の白い肌が、僅かに健康的な色合いを取り戻したような気がした。

「……場所を変えようか」

黒雪姫はするりとハルユキの手から右手を抜くと立ち上がる。

「ど、どこへ……？」

どこか二人きりになれる場所へ。

ではなく、黒雪姫の答えは至って実務的なものだった。

「スカーレット・レインへの対応を我々だけで決定してしまうわけにはいかないだろう。こういうことは軍団（レギオン）全員で話し合わないとな」

「あ……そ、そうですね」

少しばかりがっかりしつつ、黒雪姫に続きハルユキもまた立ち上がり、その後を追う。

人気のない廊下を歩いていると、不意に前を歩く黒雪姫がぽつりと呟いた。

「ありがとう、ハルユキ君……」

その言葉がじんわり、ハルユキの胸に染み渡っていくことを感じながらハルユキは頷いた。

「はい」

第6話

黒の軍団(レギオン)構成員の最後の一人、≪シアン・パイル≫こと黛拓武を交え、話し合った結果、放課後ハルユキの自宅にてスカーレット・レインと黒雪姫の邂逅が決定した。

ということで放課後、タクムは幼馴染のチユリと帰るということなので必然的にハルユキと共に彼の自宅に向かうことになった黒雪姫であったが、その内心は穏やかなものではなかった。

スカーレット・レイン……赤の軍団(レギオン)プロミネンスの幹部……。

蘇るは二年半前のあの時の記憶。黒雪姫が先代赤の王レッド・ライダーの首を落とし、その後に引き起こされた加速世界始まって以来最悪規模と称された黒の軍団(ネガ・ネビュラス)と赤の軍団(プロミネンス)の総力戦――。

当時、≪もう一つのクリア条件≫と詠われていた≪無制限中立フィールド≫の≪帝城≫攻略。全ての王の首を狩ることを失敗した黒雪姫は会談後、一縷の望みを賭け、レギオンメンバーと共に帝城攻略に挑んでいた。

黒雪姫は思いもしていなかったのだ。≪王≫を失ったプロミネンスがあんなにも早く態勢を立て直し、攻め入ってくるなんて。

まさに神の悪戯としか思えないようなタイミングの悪さで帝城攻略中に背後から挟み撃ちという形で奇襲されたネガ・ネビュラスは、前方を帝城の門を守る≪超級≫エネミー、後方をプロミネンス自慢の遠距離火力に阻まれ、総崩れとなった。

幾重もの時間が流れた。プロミネンスの執念は凄まじいものがあり、ネガ・ネビュラスの構成員は戦域から離脱することもままならず、やがて一人、また一人と加速世界から退場していった。

黒雪姫はそんな戦況を打開しようと死にもの狂いで四肢の剣を振るったが、それでも超級エネミーの猛威を己に引き付け続けることが精一杯で……まさに焼石に水にしかならなかった。

やがてネガ・ネビュラスの戦線が完全に崩壊した頃、黒雪姫は幹部集団≪四元素(エレメンツ)≫の一人である≪スカイ・レイカー≫というバーストリンカーに抱えられ、どうにか戦域を離脱した。

己のしでかした罪の重さに必死に耐えながら――。
そして、最寄りの離脱（リーブ）ポイントまでどうにか来たとき、ソレはいた。
――久しぶりね……ロータス。
憎しみの赤黒き≪心意≫の焔を静かに湛えた二代目赤の王が。
黒雪姫にその首を断たれたレッド・ライダーの唯一無二の存在であった、フレイム・ローズが。
黒雪姫はなす術なく敗れた。かけがえのない存在であったライダーを失って、彼女の心の内に生まれた≪破壊≫の心意の威力はまさに絶大で、黒雪姫の≪心意≫など何の抵抗にもならなかった。
手足をもがれ首と胴体のみとなり、もはや戦闘不能状態となった黒雪姫をフレイム・ローズは――
――永遠の苦しみの果てに惨たらしく死になさい？
エネミーの巣食う魔の洞穴に投げ入れた。
――あはっ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!!!
そこからの記憶は定かではない。
凄まじい痛み。そして、餓鬼（グール）型エネミーに喰い散らかせられる黒雪姫の姿を眺めながらけたたましく笑うフレイム・ローズの声が聴覚に張り付いているのみ。気が付いた時には黒雪姫は加速世界から離脱していた――。
黒雪姫はひたすら恐れていた。己の復活が加速世界全体に知れ渡った今、フレイム・ローズは何を思っているのかということを。
そして考えた。もし、≪スカーレット・レイン≫が自分のリアルを割る為に送り込まれてきた刺客なのだとしたら。自分を今度こそは確実に殺すために送り込まれてきた刺客なのだとしたら――。
話したかった。その可能性を。自分の身を守るために。もうあのような恐怖を味わいたくはなかった。
だが、それはできない。
ハルユキ君を……ハルユキ君だけは守らないと。
黒雪姫のかけがえのない≪子≫であるハルユキはスカーレット・レインにリアルを割られている。もし、黒雪姫が欲求を拒んだら、腹い

せにハルユキのリアル情報をばらまくかもしれない。それだけは絶対に避けなければならない。

無論、スカーレット・レインにもこちらにリアル情報をばらまかれるリスクは大いにあるが、プロミネンスは義理堅いことで知られる。メンバーがリアルアタックでポイント全損と知った暁には軍団（レギオン）総力を以て仇討ちに走るだろう。そこまでのリスクを負ってまでリアルアタックを仕掛けようと考えるバーストリンカーは皆無であり、故にスカーレット・レインのリアル情報はそこまで決定的な対抗策にはならない。

つまり、黒雪姫にはもはや、会うことしか選択肢が無かったのだ。

「あの……別に何も面白いものもないフツーの家ですよ。ペットもいないし」

マンションの一室にたどり着いたハルユキが扉を開ける前にこちらに振り向く。

「そうか。いや、問題ない。毛の抜ける動物は嫌いだ」

内心に抱えた不安や葛藤をどうにか悟られまいと己の内に抑え込み、黒雪姫はいつもと変わらぬ調子で頷いた。

＋＋＋

≪ザ・ディザスター≫。

加速世界の黎明期、≪クロム・ディザスター≫という名のバーストリンカーが所有していた≪強化外装（エンハンスト・アーマメント）≫の名称である。

その性能は最強の一言に尽きた。

あらゆる防御を容易く貫くその圧倒的攻撃力。

あらゆる攻撃を跳ね返すその圧倒的防御力。

あらゆる存在を追随するその圧倒的機動力。

本来なら併用できないはずのそれらすべての要素を≪鎧≫は兼ね備えていた。

しかし、そんな最強の≪鎧≫には一つの大きな欠点があった。

それはその使用者の精神に異常を来たせること。如何なる高潔なる

精神を持つ者であろうとも、≪鎧≫の使用者は例外なく狂暴かつ残虐な狂戦士（バーサーカー）へと変貌させられてしまう。
加速世界が始まって以来、四度に渡って≪鎧≫は討伐された。しかし、いくら消滅させようとも≪鎧≫は必ずまた新たな持ち主を見出し、その精神を乗っ取り、加速世界に再び新たな恐怖と破壊をもたらす。
やがて、≪鎧≫は絶望と無秩序の象徴としてこう呼ばれるようになった。
≪災禍の鎧≫と――。

＋＋＋

スカーレット・レイン――≪上月由仁子≫と名乗った女の子から、粗方の話を聞き終えたハルユキはだらだらと脂汗を掻きながらもごもごと口を動かす。
「ぼ、ぼぼぼ僕に足止めさせようっていうんですか!?　そ、そのっ≪災禍の鎧≫を！」
「ハルユキ君、何事も経験だ。やってみるのも悪くはないと思うが」
にこり、と笑いかけてくる黒雪姫にハルユキはわたわたと高速で首を横に振る。
「むむ無理ですよ！　レベル８のスカーレット・レインが負けた相手ですよ!?　僕なんてパッと捕まれて、喰われて終わりですよ！」
そんなハルユキの援護射撃かどうかはわからないが、軍団（レギオン）の参謀役であるタクムが口を開く。
「たしかにスカーレット・レインの話に乗るには無理がある。マスター、我々はたった三人の軍団（レギオン）なんです。このスカーレット・レインが我々を騙し討ちにしようと罠を張っている可能性は○ではないんですよ？」
タクムの言葉に黒雪姫はたしかに、と頷く。
「その危険性は私も考えたさ。大体、≪災禍の鎧≫を断罪するのではなく、救済しようという話自体に無理があるしな。具体的な案も無

しにその話に乗るというのはあまりにも愚かで滑稽な考えだ」
だがな、と黒雪姫は言葉を続ける。
「どのみち我々に拒否権はないのだ。このスカーレット・レインにリアルを割られたその時点でな。それに仮にこの依頼がうまくいく場合、天下のプロミネンスの大幹部に借りを作っておくことは悪いことではあるまい」
その言葉にハルユキはハッ、と悟る。
――そうだ……スカーレット・レインの後ろには赤の王――あのフレイム・ローズがいるんだ……もし、この依頼を断って、スカーレット・レインがその腹いせに僕たちのリアル情報を報告したら……。
ただでさえプロミネンスはネガ・ネビュラスを敵視しているのだ、瞬く間に大軍で攻め入ってくることは目に見えていた。
タクムもハルユキと同じ考えに至ったのか、クッ、と歯ぎしりしている。
自分のせいで軍団（レギオン）が危機に陥っているという現実にハルユキは内心で必死に黒雪姫とタクムに向けて謝罪の言葉を述べた。
そんなハルユキの内心を読み取ったのかどうかは定かではないが、ハルユキに気にするなといった目配せをした黒雪姫は由仁子に向けて告げる。
「お前の話には乗ってやろう。だが、その代わりに……」
「わーってるって。プロミネンスNo.2の名に賭けてアンタらのリアルは喋らない。――たとえそれが赤の王相手だったとしてもな」
その言葉には上月由仁子という少女の≪覚悟≫が込められているような気がした。
自分が忠誠を誓う主（マスター）を裏切ることになる形となったとしても、チェリー・ルークを≪鎧≫の支配下から救い出すのだという彼女の強い覚悟が。
由仁子の言葉に黒雪姫はよし、と頷くとしかし、と僅かながらに眉を寄せる。
「しかしながらどうやって、クロム・ディザスターを待ち伏せするのだ？　広大な無制限中立フィールドでの待ち伏せが容易ではないこ

とは貴様なら重々承知しているだろう」
「……アンタらに迷惑をかけるつもりはねぇ。あたしが責任を持って時間と場所を特定して見せる。今はまだ、恐らく明日の夕方……としか言えねぇが」
「ほう。それができるのだな？」
黒雪姫の含みのある問いに、由仁子はぐいっと肯定して見せた。
「ならば任せよう。明日の放課後、再びここに集合し、≪無制限中立フィールド≫にダイブする。それでいいな、ハルユキ君、タクム君」
「はい！」
タクムが即座に返事を返す中、ハルユキの頭は一つの疑問で一杯だった。
――無制限中立フィールドって……ナニ？

＋＋＋

「……そう。やはり≪鎧≫は明日の夕方頃に……」
『大変だったンだぜ。これまでの≪鎧≫の出現パターンを一から分析して、次に加速するであろう時間帯を絞り込むのは』
「その事に関しては本当に感謝してるわ。報酬はウンと弾むから、また次回も頼むわね」
『まぁ、ローズさんはオイラにとってもお得意様だからナ～。報酬が弾むンならこれからも生きのいい≪情報≫をどんどん提供していくヨ』
「ふふっ、ありがとね。――ところで依頼していたもう一つの≪件≫についてなんだけど……」
『黒と赤を除く五大軍団（レギオン）の動向を教えて欲しいだっけ？　コッチもバッチシ調べてあるヨ～』
――同日の夜、練馬区某所の高層マンション最上階のベランダにて音声通話を行っていた一人の女性のやり取りにて。

第7話

翌日の放課後。黒雪姫とタクムは荷物を家に置いてから来るというので、ハルユキは一人で家に帰った。

「……ただいま」

「おう」

ハルユキの帰宅にソファーに座っていた由仁子が相槌を打つ。

「残り二人は？」

「一度家に寄ってから来るって。あと二十分はかからないと思う」

「よし、何とか間に合いそうだな。クロム・ディザスターは、まだ動いてねぇ」

その言葉にハルユキはぱちくりと瞬きをする。どうやら由仁子は何らかの手段でクロム・ディザスターの動向を追っているようだが、そのためには当然、外部ネットに繋がなければならないはず。

「あの……グローバル接続して大丈夫なの？　ここは赤の軍団（レギオン）の領土外なのに」

自分の軍団（レギオン）の領土内であるならば対戦の受け入れ拒否の設定が行えるが、ここは彼女（プロミネンス）の領土ではない黒の軍団（レギオン）の領土。グローバルネットに接続してしまったら、原則として由仁子は他のバーストリンカーに乱入されてしまうのだが。

「さっき一回だけ命知らずに≪乱入≫されたけどな。十秒でブッ飛ばして、他の奴らにもあたしの邪魔すんなっつっといたからもう平気だろ」

「そ……そうっすか……」

よくよく考えてみれば余計な疑問だったかもしれないとハルユキは思った。かの大レギオン≪プロミネンス≫の№２に一対一で勝てるバーストリンカーは、それこそ同レベル、もしくは≪純色の七王≫クラスのバーストリンカーでもない限りはもはや勝負にもならないだろう。それほどまでに、このスカーレット・レインの極大火力は尋常なものではなかった。

しかし、当然ながら対戦のメッカである新宿区や渋谷区に比べれば

この杉並区は過疎区域であり、そこまでのハイレベルのバーストリンカーが現れる事はほぼ皆無であり、≪王≫もまた≪不可侵条約≫によって原則として自分の領土から出てくることはない。
つまり、今この区域で由仁子が警戒しなければならない相手は反逆者たる黒雪姫のみであるのだが……。
そこまで考えてから、ハルユキはふと、この目の前の赤毛の少女もまた潜在的には黒雪姫の討伐者となるべき人物だということに気が付いた。
「あの……ニコちゃ……ニコ。一つ訊いていいかな」
「なんだよ」
じろっと睨まれ、ハルユキはソファーの横に直立したままシンプルかつストレートに訊ねた。
「き、君は、黒雪姫先輩を憎んでないの？」
「……」
返ってきたのは長い沈黙だった。俯けられたその真紅の瞳はただひたすらに真剣みな色合いを帯びていて、その内面を読み取ることはできない。
「……わかんねぇ」
やがて、ボソッと告げられたその言葉にハルユキは半ば唖然と言葉を発した。
「わかんない……って、どういうこと？」
「わかんねぇモンは、わかんねぇんだよ。憎んでいると言われれば憎んでるし、憎んでないと言えば憎んでもない」
「？」
頭の上に疑問符を浮かべるハルユキに、由仁子は苦笑する。
「たしかにあたしの最初の主（マスター）たるレッド・ライダーはアンタの主（マスター）に殺された。……けどな、その頃のあたしはまだバーストリンカーになり立てほやほやのひよっ子で、レッド・ライダーと直接話したことすらなかったんだ」
「そ、そうなの……？」
「ああ。だからレッド・ライダーが討たれた事を知った時も衝撃こ

そ受けたが、古参からの連中と比べればそこまで悲しみに暮れたり狂乱もしなかったし、勃発した黒（ネガ・ネビュラスプロミネンス）と赤の戦争の時も先輩の後にホイホイ着いていく感覚に近かったんだ。……だから黒の王（ローダス）が赤の王（ライダー）の首を狩ったということに関しては直接的に恨んでいるというわけじゃねぇ……」

だけどな、と由仁子はどこか悲しげな眼差しでハルユキを見据えた。

「あたしの今の主（マスター）は違う。ライダーの後を継いだ二代目赤の王……ローズさんは当時、しがないミドルレンジのバーストリンカーでしかなかったあたしを……壁にぶつかって何をどうしたらいいかわかんなくなっちまってたあたしを拾い上げてくれた……導いてくれた、あたしにとってかけがえのない恩人なんだ。ライダー（大切な人）を失いながらも皆をまとめ上げるために強く凛々しくあり続けたあの人の立ち姿はあまりに痛々しくて……見ているだけで切なかった。今回こうして助けてくれるのは本当に感謝してもしきれねぇが……それでもあたしは、あたしの大切な人を傷つけた黒の王（ローダス）を許すことはできねぇ……絶対に」

「……」

真剣な眼差しでそう告げた由仁子に、ハルユキは言葉を失った。というよりは掛けられる言葉を見つけられなかった。

なぜなら、同じく敬愛すべき主（マスター）を持つハルユキからしてみれば、由仁子の想いは何より理解できたから。

主（マスター）の笑顔を守りたいという配下の想いは、きっとどの軍団（レギオン）に所属するバーストリンカーも抱く、同じ想いであるはずだから――。

どうしようもなく切ない想いで一杯になった。だって、昨夜は黒雪姫も家に泊まって、一緒に夜ご飯を食べたばかりじゃないか。一緒に深夜遅くまでZ指定のレトロゲームであんなにも楽しく遊んだじゃないか。

それなのに、分かり合うことはできないのかと。

黒と赤は、永遠に分かり合うことはできなのかと――。

「「……」」

重々しい静寂が辺りを支配する中、来訪者を告げるインターホンの音が軽やかに響き渡った。
＋＋＋
「……来た！」
由仁子が鋭く声を上げたのは、黒雪姫とタクムがハルユキの家に上がって間もなくしてのことだった。
「チェリーが西武池袋線上りの電車に乗った！　今までのパターンからして、今日の狩場はブクロだ」
「池袋か。厄介だな」
軽く舌打ちした黒雪姫はどうする？　と由仁子に問いかける。
「時間的にはまだ余裕はある。ここからダイブして≪中≫から行くか？」
「≪エネミー≫に補足されたら面倒だが……ま、このメンツなら大丈夫だろ」
「うむ」
≪中≫？　≪エネミー≫？
ちんぷんかんぷんなハルユキに、床に正座した黒雪姫が顔を向ける。
「……それではハルユキ君。キミに、我々バーストリンカーの真の戦場へとダイブするためのコマンドを教える。バーストポイントを１０消費するが、問題はなかろうな？」
「え、ええ、１０ポイントくらいなら。そ、それより真の戦場って……？」
「言葉通りだ。我々が≪加速世界≫と呼ぶものの本質がそこにある。いいか、私のコマンドのとおりに、続けて唱えろ。行くぞ……五代目クロム・ディザスター救済ミッション・スタートだ！」
そこで一度大きく息を吸い、背筋を伸ばした黒雪姫は凛と響く声音で叫んだ。
「アンリミテッド・バースト!!」
＋＋＋
ハルユキ達が加速するおよそ五分ほど前。練馬区某所の高層マン

ション最上階の一室、リビングルームに設置されたソファーにて。
「……そろそろ行っておきましょうか」
ぼそりと呟き、燃えるような赤髪を持つ彼女は静かに目を閉じると、唄うように唱えた。
「アンリミテッド・バースト」
彼女の聴覚に響き渡るは荒々しき雷鳴音。
物語は新たな展開に向けて、加速する――。

第８話

アンリミテッド・バーストコマンドにより、≪無制限中立フィールド≫に降り立ったハルユキは黒雪姫や由仁子から簡単にこのフィールドに関するレクチャーを受けた後、飛行アビリティによってタクムを踏まえた三人を抱え、池袋の方角へ移動を開始していた。

「ほら、ハルユキ君。あれを見たまえ」

右腕に乗る黒雪姫が、細い剣の切っ先で東側を示す。

言われるがままに視線を向けたハルユキは、視界に収めたそのモノの存在に危うく腕に抱えた黒雪姫と由仁子を落としてしまいそうになった。

「うわっ……な……なん……!?」

深い霧の流れる大通りをゆっくりと移動する巨大な影。

全体のフォルムは四足獣のようだが、胴体はエイのように平べったく、頭のあるべきところから無数の触手を地面へと垂れさせているその姿はまさに異形としかいいようがない。長くたくましい脚の先端からは凶悪なまでに鋭い鉤爪が伸びる。

「なんですか……アレ」

「≪エネミー≫だよ。システムが生み出し、動かすこの世界の住人だ」

黒雪姫の言葉に続けて、由仁子が声を潜めて告げる。

「あんなでっけぇのにタゲられたらこのメンツでも手間取るだろうから見つかんないようにいけよ」

「はい……って襲ってくるの!?」

「エネミーって単語の意味から教えなきゃなんねぇのか？」

その憎まれ口に反応する余裕もなく、ハルユキは慌てて高度を取った。異形の巨獣は上空の見物人に気づく様子もなく、ゆっくりと歩を進めている。

「な……なんでそんな危ないものが設定されてるんです……」

「なぜ、というか……つまり……」

黒雪姫が答えかけ、口籠った。由仁子もタクムも同様に返答に窮し

た気配を発するので、ハルユキは首を傾げる。
その時、脚にぶらさがるタクムが抑えた声で叫んだ。
「あっ、ほら、ちょうど始まるよ。≪狩り≫だ」
「か……かり……？」
直後、爆発音が鳴り響き、巨大な獣は奇怪な雄叫びを迸らせた。
思わず叫びそうになるのをどうにか堪え、よく見ると怪物のさらに向こう側に幾つかの小さな影がある。
≪エネミー≫かと思ったが違う。色とりどりの装甲をまとうあの人型のシルエットは――ハルユキ達と同じバーストリンカーだ。
爆発音は通りの左右に並ぶビルの屋上から迸る幾条ものビームや実弾の火炎によってもたらされていた。
≪エネミー≫は雄叫びをあげるとビームの飛来するビルに向けて突進しようとするが、その直前で道路に陣取るバーストリンカーたちが一斉に中距離攻撃を放つ。立て続けの爆発に飲み込まれた獣は怒りの声と共にターゲットを変更し、路上に身をさらす数人へと突っ込んでいく。
「あっ、危ない！」
思わず叫んでしまう。巨獣の前脚がはるか上空から振り下ろされ、リーダー格を踏み潰した――かのように見えたが青銀色の重装甲を持つそのデュエルアバターは交差させた両腕で巨大な鉤爪を受け止めて見せた。
とは言え、足を止めて正面戦闘するつもりはないらしく、荒れ狂う獣の猛攻を数人がかりでガードしながら徐々に後ろに退いていく。
ビルから十分離したところで再度の屋上からの一斉射撃。巨獣の尻尾の付け根に命中した。どたどたと方向転換し、再びビルに突進する獣に今度は地上部隊が追いかけながらの近接攻撃を仕掛ける。
「なかなかいいパーティーだな。ヘイト管理が上手い。あのリーダーは誰だ？」
「確か緑のレギオンの幹部じゃねぇかな。パーティーは混成みてーだけど」
黒雪姫と由仁子のやり取りを聞いたハルユキはようやく、眼下で繰

り広げられている戦闘の内実を悟った。
「そ、そうか……あのバーストリンカーたちは、その……エネミーっていうでっかい怪物に襲われてるんじゃなくて、逆にあれを狙って倒そうとしてるんですね」
「そうだ。つまり≪狩り≫だ」
「てことは倒せば経験値……じゃなくてバーストポイントが……？」
「うむ、そういうことだ」
頷く黒雪姫に続いて、ニコがぽんとハルユキの頭を叩いた。
「もうあんたも解ったろ。この無制限中立フィールドにエネミーが存在する理由はつまるところそれがフィールドの存在理由ってわけだ。通常の対戦だけじゃなくて、ここで狩りをすることでもバーストリンカーはレベルアップすることができる。でもな……」
「……その効率は対戦と比べれば著しく悪い。あれ級の大型獣を、全滅のリスクを冒して狩っても、同レベル大戦での勝利一回分……つまり１０ポイント手に入るかどうかだ」
説明を引き継いだ黒雪姫は、だがな……と言葉を続ける。
「それは仕方のないことなのだ。この世界でエネミーを狩るのはバーストポイントを無から生み出す行為な訳だからな。つまり、あくまで対戦格闘ゲームであるブレイン・バーストにおいて、無制限中立フィールドでの狩りは本来、補助的なポイント供給方法でしかなかったのだ。しかし現在はそれがほとんど唯一の高レベルへと達する道となってしまった。理由は……」
「相互不可侵条約……ですね」
ハルユキは呟いた。
「ハイレベルのバーストリンカーは、通常対戦したくとも他のレギオンの領土に殴り込むわけにはいかない。その理由となるべき≪領土戦争≫は条約のせいで機能していない……」
遥か眼下で繰り広げられる激戦から離れ、再び北上したハルユキの足元でタクムが考え込むような声を出した。
「マスター、でも正確にはまだあと一つだけありますよね。今の状

況下でも高確率でポイントを稼いで、ハイレベル帯まで駆け上がる手段が」
「え？　タク、それって……？」
「つまりさ……この世界にはエネミー以外にも狩りの対象が存在するんだよ。しかも、もっとずっと大量のポイントを持ってる獲物が……」
一瞬考え込んでから、ハルユキは鋭く息を吸い込んだ。
「そ、そうか……さっきの獣じゃなく、彼らのほうを……」
生まれたわずかな沈黙を、黒雪姫が静かに破る。
「そういうことだ。通常対戦では自レギオンの領土からほとんど出てこない故に挑みたくても挑めないバーストリンカーに、この場所でなら好き放題に襲い掛かることができる。しかも待ち伏せ、不意打ち、なんでもありだ」
「そして、そいつを実行しているのがまさに≪チェリー・ルーク≫……いや≪クロム・ディザスター≫ってわけだ」
低く由仁子が呟き、真紅のつぶらなレンズに覆われた両眼を前方へ向ける。
すでに放射七号線である目白通りも越えつつある。目的地である池袋の中心部はすぐそこだ。
＋＋＋
目的地の直前まで来たところで、念には念を入れて地上から行こうと提案した由仁子の言葉に従い、眼前に広がる窪地のような場所に降り立とうとしたまさにその時だった。
「ハル!!」
足元でタクムが叫んだ。
反射的に下を向いたハルユキが捉えたのは、地上に建ち並ぶビルの隙間から伸び上ってくる、眩いオレンジ色の火線だった。
「……ッ！」
悲鳴を上げる余裕すらなく、ハルユキは右斜め前方へ回避行動を取る。
銀翼の脇を巨大な熱量が通過していくのを認識する間も無くハル

ユキは視界の隅で第二射を捉えていた。
黒雪姫が低く叫ぶ。
「まさか……クロム・ディザスターか！」
それに対して由仁子が、緊張の中にも唖然とした響きのある声で答えた。
「有り得ねぇ……早すぎる、出現までこっちの時間じゃまだまる一日はあるはずだ！　それに、あいつにはこんな技は……」
二人の会話をハルユキは絶叫で遮った。
「降ります！」
なぜなら先ほどの第二射に続き、三射四射と複数の光点が瞬くのが見えたからだ。一人ならまだしも、三人も抱えたこの状況下では避け切ることは不可能だ――。
まずタクムが両腕を離し、地面を抉りながら着地する。直後に左右の腕から黒雪姫と由仁子が飛び出して軽やかに地面に降り立つ。
そんな三人の中央にごちゃっと無様に墜落してから、ハルユキは慌てて跳ね起きた。先ほどのが敵の奇襲攻撃なのだとしたら、すぐさま追撃が来るはずだからだ。
案の定、ざし、と小さな足音がハルユキの聴覚を叩いた。それと同時に着地したクレーターと思わしき窪地の西側の縁に一つの人影が現れる。
あのシルエットは間違いなくバーストリンカーであり――
「あれが……さっきの攻撃者……？」
ハルユキは声にならない声で呟く。
しかしほんの一秒後だった。そのすぐ右隣りに二つ目、三つ目と次々に影が現れたのは。
「い……いったい……」
タクムが低く呻く間にも人影は次々と増えていき、終いにはその総数は三十にも達した。
クレーターの縁を埋め尽くすは大型、小型、遠隔、近接様々な種類のバーストリンカー。その特徴は多岐に渡るが、たった一つだけ共通するものがある。

それは気配。無言で獲物を凝視する、狩人の気配。
そんなバーストリンカーたちの間から最後に現れたのは、一際存在感のあるデュエルアバターだった。
細長い四肢。身長はシアン・パイルをも超えるだろうが、その華奢さはシルバー・クロウなみだ。
トランプのジョーカー札を彷彿とさせる見るものを不安にさせるフェイスマスク。そして装甲は――わずかなくすみも濁りもない、ウラン鉱石のような毒々しい――黄色。
「!!」
戦慄が走った。あれほど鮮やかな彩度を持つデュエルアバターはそうはいない。今まで見たことがあるのは闇の漆黒と、真紅の煌きを持つたった二人だけだ。
つまり……つまりあのデュエルアバターは……。
ハルユキの想像を裏付けするかのように、傍らに立つ真紅のアバターが、掠れた声を放った。
「≪イエロー・レディオ≫……≪黄の王≫……なぜここに……」
≪ブラック・ロータス≫。≪フレイム・ローズ≫に続いて初めて耳にする第三の王。
加速世界に七人しか存在しない、レベル９のバーストリンカー。
しかし、上野から秋葉原にかけてを領土とする黄のレギオンがどうして今この池袋に――？　そんな疑問がハルユキの脳裏に浮かび上がったその時には隣で由仁子が叫んでいた。
「……てめぇか！　てめぇが全部仕組んだのか、イエロー・レディオ！」
激高した由仁子の叫びにイエロー・レディオはおどけたように肩を竦める。
「仕組んだ……とはどういうことでしょう？　我々はただ、ふらふらと飛んでいる子虫を撃ち落してみただけですよ？」
「あきらかにおかしいだろうが。こんなピンポイントに狙って……それもこんな大人数で襲って来やがって……どう考えても予め襲撃の計画を練っておかねーと、この無制限中立フィールドでの奇襲は不

可能だろうが!!」
　由仁子のその台詞でようやくハルユキは由仁子の言わんとすることを理解した。
　そう。あまりにも不自然なのだ。この一千倍に加速されたこの空間において、このような大人数で待ち伏せをしていたことが。仮に内部でレギオンの構成員がハルユキたちを見つけていたにせよ、外部に連絡し、メンバーを集めて池袋に集合する時間的余裕はないはず。
　できるはずもない。予め、この場所にスカーレット・レインが現れるという情報を掴み、計画を練っていない限りは。
　しかし、イエロー・レディオに動揺の色は見られない。
「仰る意味がわかりませんね？　私はただ、不可侵条約に反して私のかわいい配下を襲い、ポイント全損に追い込んでくれた赤のレギオンの何方に、その責任を取ってもらおうと出向いたまでですよ？　ここ最近、うちの領土で傍若無人に暴れているあのデュエルアバターにはほとほと困っておりましてねぇ」
「てめぇが蒔いた種だろうが！　あたしを……いや、狙いはローズさんだな？　ローズさんをこの場におびき出すために隠匿した≪災禍の鎧≫をチェリー・ルークに渡し、あいつを唆して、条約違反の無差別攻撃に走らせたんだろう！」
　由仁子の言葉にイエロー・レディオはおどけたように言った。
「たしかに責任を取らせるならレギオン構成員の不始末はその長である赤の王の首を以てして償わせたい思いはあります。それは認めましょう。けれど≪鎧≫の隠匿とは？　≪鎧≫はずっと昔に消滅したはずですよねぇ？　……そのチェリー・ルークとやらが勝手にまた作ったんじゃないですか？」
「てめぇ……！」
　レディオのあからさまな挑発に由仁子がもう我慢がならないかのように足を一歩前に踏み出す。
「許さねぇ……てめぇだけは絶対に……許さねぇぞ!!」
　今にもあの固定砲台を召喚してしまいそうな勢いの由仁子を、意外にもイエロー・レディオはその極細の腕を上げて止めた。

「少し待ってください。たしかにあなたをこの場で処刑し、採算を取るのは矢房かではありませんが……あなたも今、この場で死にたくはないでしょう？」
「あぁ？　なに言ってやがる？」
「見逃してあげようということですよ。いくらあなたが赤のレギオンのナンバー2だからと言って、あなたの首自体にはそれほど魅力はありませんし……どうやらもっと大きな獲物が釣れたみたいですしね……」
「まさか……」
イエロー・レディオは頷いた。
「ええ、そうです！　加速世界最大にして最悪の裏切り者――≪黒の王≫ブラック・ロータス……彼女の首を差し出せば今この場は見逃してあげてもいいということですよ！　あなたもあのフレイム・ローズの下に仕える者ならばレッド・ライダーを失った彼女の憎しみと悲しみは重々理解しているはずでしょう！」
その言葉にハルユキの背筋が凍りついた。
おそらく、このイエロー・レディオは≪災禍の鎧≫を利用し、最初は赤の王の首を狩るつもりだった。理由は簡単、自らがレベル１０に上り詰めるための五つの首級の一つとするためだ。≪鎧≫を利用すれば他のレギオンの王の首を合法的に狩ることは簡単なことのはずだった。
しかし、予想外のことに現れたのは赤の王ではなく、スカーレット・レイン。これでは当初の目的である王の首を狩ることはできない。
だが幸いにもこの場にはもう一人、王の姿があった。加速世界における最大級の裏切者であり、賞金首である黒の王ブラック・ロータスの姿が。
つまり、イエロー・レディオは今この場を以てしてあくまで合法的に黒の王の首を寄越せと言ってきているのだ。加速世界最大の裏切者を野放しにしておくことはできない……黄の王の大義名分はそういったところだろうか。
「我々が代わりに晴らしてあげますよ……彼女（フレイム・ローズ）の悲しみを……

レッド・ライダーの無念を……」
「……」
右手を差し伸べるように突き出してくる黄の王に由仁子は立ち尽くしたまま言葉を発しようとしなかった。
冷や汗が流れる。このままではマズいということは重々、ハルユキも理解している。思わず背後に立つ黒雪姫の姿を見てしまいそうになるが、その前に由仁子が静かに口を開く。
「……たしかにあたしの王はこの黒の王のせいで心に途方もない傷を負った……それは変えられないし、変えるべきでもねぇ事実だ……」
静かに発せられたその言葉にまさかとハルユキは前に立つ由仁子の姿を見やる。思い返されるは今日、黒雪姫やタクムが訪れる前に交わした二人きりの会話の時に告げられた、あの言葉。
――それでもあたしは、あたしの大切な人を傷つけた黒の王（ロータス）を許すことはできねぇ……絶対に。
許すことはできない。由仁子はそう言っていた。
由仁子の赤の王に対する忠誠は筋金入りのものであることは理解している。そしてそんな由仁子ならば今、この場で≪鎧≫の救済という自身の目的を放棄して、黄の王に黒雪姫の首を狩らせる道を選ぶのではないか――？
しかし、そんなハルユキの心配は杞憂に終わった。
「だがそれとこれとじゃ話は別だ。あたしはこいつらに恩がある。あたしのレギオン（プロミネンス）が黒のレギオンに対して敵対しているということはこいつらも理解しているはずなのに……今宵、こうしてあたしに協力してくれた……だからあたしも今、この場でロータスの首は狩らせねぇ！　絶対に！」
「ニコ……」
由仁子のその凄絶な宣言にハルユキは心を打たれた。そしてつい先ほどまでの自分を恥じた。
由仁子はそこまでの覚悟を持って今、この場に臨んでいたというのにそんな彼女の覚悟を軽く見るような考えをして恥ずかしい、と。

「そうですか……それは残念ですねぇ……」
自らの提案を否定されたというのにも関わらず、黄の王から動揺や焦りのようなものは感じられなかった。
むしろ、こうなることを望んでいたかのような……そんな気さえ感じられる。
「あなたの高潔な心意気は理解しました。私の慈悲を受け取って貰えなかったのは残念ですが……」
わざとらしい、その言葉。
猛烈に嫌な予感がハルユキの背筋に走る。
「余裕ぶっこいてる暇、てめぇにあるのか？　レベル９でこそねぇが……あたしは王に負けるつもりは微塵もねぇし、こっちにはレベル９の王がいる。その陣容は王一人に対しての陣容であることは明らかだ……レベル９級（クラス）二人を相手にその陣容で勝てると思っているのか？」
「たしかに二人相手は想定していませんでしたし、あなたの実力が王に極めて近い位置にあることは重々理解しています。……けれどそれは二人で戦えたらの話でしょう？」
小さな違和感をハルユキは覚えた。
そういえば黒雪姫はなぜずっと沈黙しているのか。普段の彼女なら、黄の王が現れたその途端、由仁子以上の勢いで食って掛かっているはずでは？
さっと後ろを振り向いたハルユキが見たのは――。
両手の剣をだらりと下げ、まるで何かを恐れるかのように項垂れる漆黒のアバターの姿だった。
「ロータス……？」
黒雪姫の異変を感じ取ったのか、由仁子も肩越しにこちらを見つめていた。
「私はね、ずっと、ずうっとこんなふうにあなたに会える日を心待ちにしていたんです、ロータス。長いことポケットにしまい続けていたこのささやかなプレゼントをあなたに差し上げるためにね！」
芝居がかった仕草でまっすぐ差しのべられた黄の王の指先に、何か

四角いものがちかっと光るのをハルユキは見た。トランプカードと同じようなサイズだが、模様などは見当たらない。
イエロー・レディオは器用に指先で弄んだ後、ぴんとカードを弾く。地に音もなく突き刺さったそれを見て、傍らの由仁子が低くささやく。
「リプレイファイルだ」
直後、カードの表面が眩く輝き、真上に円錐形の光を放出した。
そうして空中に提示された立体映像には、これまでに見たことのない一人のデュエルアバターが映っている。
赤い。
そのフォルムこそオーソドックスな人型だが、そのバランスよく盛り上がった装甲は、これ以上はあるまいと、そう断言できてしまうほどの純粋な赤に輝いている。
スカーレット・レインの紅とはまた違う、言うなれば情熱の赤。
このデュエルアバターは、まさか――
「先代……≪レッド・ライダー≫」
思わず掠れ出た、由仁子のその言葉。
黒雪姫が一歩後すざり、呻くように言った。
「やめろ……やめろ！」
半透明の立体映像が動き出したのはその時だった。
＋＋＋
リプレイファイルの内容は、二年半前のあの時……≪相互不可侵条約≫が締結されたあの時のものだった。
黒の王が不意討ちで抱き締めるように赤の王の首を切り落としたあの時の――。
「やめろ……やめろ、やめろ……！」
「せ……せん、ぱ……」
反射的に呼びかけた自分の声が、激しく震えていることにハルユキははっと息を詰めた。
黒雪姫はわずかにハルユキを見たが、すぐに顔を反らし、何度も首を左右に振った。

「ハルユキ君……わたし、は……」
黒雪姫の鏡面ゴーグルから光が消えうせたのはその時だった。
まるでブツンと電源が切れたロボットのように、漆黒のアバターから力が抜ける。
がしゃん、と乾いた音を立てて、その華奢なアバターを地面に伏せさせた黒雪姫の姿に、ハルユキは途方に暮れることしかできない。
「せんぱい……先輩？」
そんなハルユキの聴覚に、由仁子の痛々しい呟きが響き渡ってくる。
「……≪零化現象≫……！　ロータス、あんた……そこまで……」
そんな由仁子の言葉の意味がわからず、問いかけようとしたハルユキは、響いた高らかな笑い声を聞いて身体を強張らせた。
「くくく……ふふふ、くふふはははははははは!!」
嘲笑の主は、クレーターの縁よりこちらを見下ろす黄の王のものだった。
「くふふふふ……やはりね。あなたはまだこの裏切りを引きずっていると思っていましたよ。そこまで期待通りに零化してくれるとは、むしろ残念ですらあります……その程度の覚悟でよくもレベル１０を目指すなどという大言を吐けたものですね、ブラック・ロータス！」
「き……さま……」
ハルユキの喉から軋むような呻き声が漏れ出る間にも黄の王はクレーターいっぱいに声を張り上げる。
「それでは、我がカーニバルの最終演目、楽しんでいただきましょうか！――攻撃用意！　目標は裏切りの王、ブラック・ロータス！　邪魔する雑魚も容赦なく潰しなさい！」
「くそっ」
一言毒づき、由仁子が可憐なアバターの両手を広げた。
「来いっ、強化外……」
しかし、さっと伸びたタクムの腕が由仁子の肩を押さえた。
「駄目です、スカーレット・レイン！　武装を展開したら、あなたは機動力を失って離脱できなくなる！」

そんなタクムの腕をすぐさま振りほどき、前を見据えた。
「いんだよ、ソレで」
「え……？」
由仁子は今に攻撃態勢に入る黄の軍勢を睨みつけながら言葉を続ける。
「元はと言えばあたしのせいであんたらをこんな状況に巻き込んじまったんだからな、その責任を取らねぇとあたしの腹の虫が治まらねぇ。――殿くらいはきっちり務めてやる。あんたはクロウとロータースを連れて、サンシャインシティのリーブポイントから脱出しな」
「ダメだ、そんなの！」
そんな由仁子の言葉をハルユキは半ば反射的に否定していた。
「仲間を置いて逃げるなんて、絶対嫌だ！」
赤と黒は相容れない。
由仁子の話を聞いて、ハルユキは自分と由仁子との間にたしかな壁があることを感じた。
それでも。
それでも由仁子とハルユキは理由は何にせよ、一晩を共に過ごした。
一緒にご飯を食べて、一緒にゲームをして――。
その時、本当に楽しくて浮かべた笑顔は絶対に偽物じゃないから――。
そんなハルユキを由仁子は静かに、じっと見つめていたが、やがてはぁー、と重くため息を吐いた。
「……仲間、か」
由仁子はやれやれといったように言葉を続ける。
「ここに来る前、あんだけ拒絶してやったのにあんたって奴は――筋金入りのバカだな」
「ぐっ！　でも僕は少なくともニコのこと、仲間だって信じてる！」
「意外ときなくせーんだな、お前」
苦笑気味のその言葉。ぶっきらぼうに由仁子は告げる。
「なら、好きにしな」

その向こうで、イエロー・レディオが高らかに腕を掲げ――そして振り下ろした。

「攻撃、開始ッ!!」

第９話

「攻撃、開始ッ！」

黄の王の号令と共に降り注いできたのは、豪雨の如き遠距離攻撃だった。

邪魔者を始末することから考えたのか、そのほとんどが由仁子を狙っていたが、彼女は要塞モード時とはかけ離れた俊敏さでバックダッシュし、見事に回避して見せた。

由仁子が叫ぶ。

「この包囲網をまずは抜けるぞ！」

「はい！」

「わかりました！」

その言葉にハルユキとタクムも頷く。とにかく３６０度囲まれたこの状況では撤退も応戦も不可能だ。幸い、敵はこのクレーターをぐるりと包囲しているため、壁そのものは薄い。一点突破で一気に囲みを破り、大通りまで出ることができれば脱出ポイントのあるサンシャインシティはもうすぐそこである。

由仁子の連射で東の囲みの一点に綻びができかけているのを見たハルユキはその一点に向かい地面を蹴る。黒雪姫を抱えるハルユキを援護すべく、タクムがその跡に続く。

とその時、背後で指揮を執る黄の王イエロー・レディオの、爽やかながらどこか軋みのある声が一際高く響き渡る。

「――≪愚者の回転木馬（シリー・ゴー・ラウンド）≫!!」

「うわっ!?」

黄の王の必殺技により、視界がぐるりと回り始める。たちまち進むべき方向もわからなくなり、平衡感覚も失われていく。

「フィールドが、回って……!?」

呆然と口走ったハルユキに由仁子の鋭い声が飛んだ。

「回ってるように見えるだけだ！　本当は何も動いちゃいねぇ！目をつぶって走れ！」

「そんなこと言われても、もうどっちに走ればいいのかもわからな

いよ！」
すでに実際にはどの方向が目指していた東なのかまったく解らなくなっている。闇雲に突進して出口から遠ざかってしまっては元も子もない。
「あっちだ！」
「こっちです！」
「お互い逆方向で、説得力がまるでない！」
瞬間、生じた硬直を狙い打つかのように、クレーターの外側から、怒涛の斉射が螺旋を描きながら襲い掛かる。
これは避けられない、とハルユキは悟る。ならばせめて黒雪姫だけは、守らないと――。
広げた羽の下にその黒曜石のアバタ―を包もうとしたその時、逞しい何かにハルユキは体を覆われた。
「伏せて！」
それはタクムだった。タクムはその大型アバターの逞しい両腕で三人を丸ごと抱え、倒れるように覆いかぶさってたのだった。
「タ……タク！」
そんなハルユキの掠れた声は、凄まじい炸裂音にかき消される。視界が白く塗りつぶされ、熱気が頬を炙る。そしてすぐ耳元で、親友の押し殺した悲鳴が弾けた。
「ぐうううううう!!!!」
今、タクムの広い背中にはありとあらゆる種類の遠距離攻撃が雨あられと降り注いでいる。
このフィールドにダイブした際の簡易レクチャーで、黒雪姫からこのフィールドでの痛覚は通常の対戦フィールドに比べおよそ倍程度に増大されているから注意しておけ、と言われていたのを思い出し、ハルユキは叫ぶ。
「やめろ……タク、もうやめろ！」
通常対戦で生じる痛覚刺激も通常のニューロリンカー用アプリでは有り得ないレベルなのだ。その倍の痛覚となると今、タクムが味わっている痛みはもはや想像も絶する。

場合によっては、ハルユキが狙撃回避のために造りだしたあの違法アプリで生じる痛みをも上回るのではないか――。

「い……いいんだ、ハル。君への借りは、こんなこと、くらいじゃ……返せな……」

かつてブレイン・バースト喪失の恐怖から、バックドア・プログラムをチユリにしかけ、黒の王の首を狙ったあの一件をタクムは未だ悔いている。

幼馴染を裏切ったというその事実は、未だ重くタクムの心を縛り付けていた。

無論、チユリもハルユキもその一件に関してはもう許している。ハルユキに至っては黒雪姫が病院から退院し、加速世界に復帰するに至るまでの間、タクムには世話に成りっぱなしだったのだ。今となっては借りがあるのはむしろ自分のほうであるのだ。

だからハルユキは叫ぶ。

「ない……そんなものない！　何度言えば解るんだタク！」

しかし親友はその上から退こうとはしない。ただ苦悶の声を上げて、ハルユキ達を雨あられの砲撃から守り続ける。

「醜悪な……あの木偶をとっとと焼き尽くせ」

黄の王の厭わしげな声が、無数の射撃音に混じって、かすかに届く。

それに幾つかの射撃音が呼応するが、しかしタクムは倒れない。

おそらく、現在の敵集団に含まれる赤系バーストリンカーには、それほど高レベルの者はいないのだろう。それに対してシアン・パイルはまだレベル４とはいえ青系の、しかも耐久力重視型だ。それ故にこれほどの集中攻撃を受けてもまだ倒れずに耐え続けていられるのだ。

だがそれは同時にタクム本人が味わう苦痛がどこまでも長引くことも意味する。

タクムは黄の王の必殺技の効果が終了するその時まで三人を守り続ける気なのだ。親友の覚悟を読み取ったハルユキはもう何も言えなかった。

「……あんたのことを頭だけっつったのは撤回するぜ、シアン・パイル。あと三十秒だ」

「りょう……かい、で……」
がすっ。
嫌な音が響いたのはその時だった。
タクムの重量級の巨体がゆっくりと持ち上げられていくその光景をハルユキは呆然と見つめる。
すぐ背後に立っていたのはシアン・パイルとほとんど同じくらいの体躯を持つ青緑のデュエルアバターだった。その右腕の先端の凶悪な三本の爪がシアン・パイルの胸部装甲を貫き、持ち上げていたのだ。
おそらく待機させられていた近接タイプの一人が、業を煮やして飛び出してきたのだろう。青緑アバターは太い声を放つ。
「若手の≪青≫の中じゃそこそこやる、と聞いてたけどな。ただの硬さ自慢の壁かよ、シアン・パイル」
串刺しにしたタクムをぐいっと持ち上げ、青緑アバターは低く嗤う。
「へっへ、くたばる前にちゃんと覚えろよ。お前を倒したのはこのサックス……」
「馬鹿の名前に……興味はない」
右腕を自分の胸の中央に押し当てたタクムが、弱々しくも毅然とした叫び声で放つ。
「≪ライトニング・シアン・スパイク≫!!」
その青白き閃光はタクムごと、青緑アバターの身体を穿いた。
「タ……タク!!」
凄い、やっぱりお前は凄いよ。僕よりずっと強くて頭もいい――自慢の親友だ。
胸中に吹き荒れるその感情を言葉にする機会は……今はない。
「後……任せたよ、ハル」
痛みに悶える青緑アバターに伸し掛かったタクムは最後にハルユキの顔を見て掠れた声を漏らし――。
「≪スプラッシュ・スティンガー≫!!」
黄の王の回転木馬の効果が切れたのは……タクムがその身と引き換えに爆散したその時のことだった。

＋＋＋
あまりに凄絶な相打ち劇に戦場には刹那の沈黙が流れる。
これは逃走のチャンスだった。タクムが文字通り命をかけて稼いでくれた時間だ。絶対に無駄にしてはいけない。
しかし身体が動かなかった。自分でも説明できない感情が、胸の奥で渦巻いている。
親友に守られるだけで何もできなかった自分に対する無力感。他人の心を弄ぶ卑劣な黄の王への怒り。そしてそれ以上に――自分の右腕に抱えられたまま、まるで電源の切れてしまったかのように力なく項垂れる漆黒のアバターへの――。
「先輩……先輩……」
黒雪姫先輩……なんで……なんで立ってくれないんです……」
「無駄だ、シルバー・クロウ」
呟いたのは由仁子だった。
「≪零化現象（ゼロフィル）≫……今、その女の魂から出力されてアバターに伝わるはずの信号はゼロで埋め尽くされちまってるんだ。闘志なきバーストリンカーにデュエルアバターは動かせねぇ。その女も、嫌ってほどそれは解ってるはずだ。……解っててもどうしようもねぇ問題なんだ」
ざし、と力強い足音を響かせ、まっすぐ立ち上がった彼女からはある一種の覚悟が感じられた。
「……悪ぃな、シルバー・クロウ。頭では理解できてんだ。シアン・パイルが捨て身で稼いでくれたこの時間を無駄にしてはいけないってな」
沈黙に支配される戦場に由仁子の声が静かに響き渡る。
ゆらりとその小柄な身体から立ち上るのは濃縮された闘気と怒り。
「けどな、あんなもの見せられて、尻尾巻いて逃げれるような精神は持っちゃいねぇんだよ。ここで逃げ出すのはあたしのココが許さねぇ」
自らの胸を叩き、由仁子はハルユキに告げる。
「……時間を稼いだといっても向こうの陣形はまだ無傷に近い。皆

で逃げるのはまず無理だ。ここはあたしが奴等を惹きつける。だからあんたはロータス抱えて逃げな」
「そ……そんな」
「元からこのプランで行くつもりだったんだ。早く行け」
「で……でも……」
ハルユキが言葉を返す前に由仁子は黄の王に向き直ると静かに宣言する。
「イエロー・レディオ……ここでテメェはぶっ潰す」
来い、強化外装（インビンシブル）――。
＋＋＋
でも、それでも僕は言ったんだ。仲間だって――。
黄の軍団に向けて一斉放火を開始した由仁子をよそにハルユキは黒の王の身体を抱きかかえたまま歯を食いしばる。
仲間だと、ハルユキは言った。ここで由仁子を置いて逃げてしまえば、自分から、そして黒雪姫からも何かが決定的に失われてしまうような気がするのだ。
だから逃げない。仲間を置いて逃げるなんて、仲間のすることではやはりないから――。
「……」
ハルユキは黒雪姫をその場に横たえた。見ると、砲撃を続ける由仁子の背後に張り付こうとする近接型アバターの姿が見える。
そのアバターに向かい、ハルユキは突進する。
「うおおおおおおお!!!」
ハルユキの飛び蹴りで近接型アバターは吹き飛ばされた。
すでに逃げ出していると思っていたのか、頭上から由仁子の驚いた声が聞こえてくる。
「なっ!?　逃げてなかったのかよ!?　シルバー・クロウ！」
「言ったはずだろ。仲間を置いて逃げるのは嫌だって」
そう言い返すと由仁子は唖然としたようにハルユキを見てから、やがて長くため息を吐いた。
「ほんっっっとうに筋金入りの馬鹿だな。ここでアンタが死んだ

ら、アンタの主の命も終わりだって解らないのか？」
「そんなの解ってるよ！　でも仲間を置いて逃げるなんてできない。先輩だって、同じ状況に陥ったら絶対にそう言ってるはずだ！」
ハルユキの叫びに由仁子は言葉を失ったかのように押し黙っていたが、やがて諦めたかのようにチッ、と舌打ちする。
「……そこまで言うならもうあたしは何も言わねぇよ。シルバー・クロウ、ケツに密着した近接型の相手だけ頼む」
「わかった！」
由仁子の指示にハルユキは頷いた。その視界の隅には横たえられた漆黒のアバターの姿がある。
――あの人は、黒雪姫先輩は決して完全無欠の超人じゃない。僕と同じ中学生の、傷つきやすい一人の女の子なんだ。
思い返されるは己の心無い言葉に涙する黒雪姫の姿。完全無欠で自分とは程遠い世界の住人だと思っていた彼女が初めてみせた涙は、ハルユキの心の奥に深く刻み込まれている。その時、ハルユキは彼女があらゆる面で優れていても、あくまで自分と同じ中学生でしかないことを悟ったのだ。
彼女は強くあろうとする。自分の弱さと向き合おうと、乗り越えようと、強くあろうとする。
そう、ハルユキが憧れたのは彼女の絶対的な強さに対してではない。
ありとあらゆる逆境に抗おうとする魂の輝きに、ハルユキは絶対的に惹かれたのだ。
――だからあなたはもう一度立つはずだ。先代の赤の王とどんな間柄だったのかは知らないけれど、その記憶を乗り越えて、立ってくれるはずだ。そうでしょう!!
新たに迫る敵アバターを相手にしながら、ハルユキはその銀面の下で無音の叫びを放つ。
「舐めるなぁぁっ!!」
由仁子が吼え、左右の主砲とミサイルポッド、機銃をがしゃりと展開する。

それらが一斉に火を噴く――その直前、奇怪な音がハルユキの聴覚をかき回した。
ノイズとしか言いようのない高周波の雑音が空気を揺らす。同時に視界が二重に三重にぶれる。
放たれたスカーレット・レインのミサイルが突如空中で錐揉みし、あらぬ場所に突き刺さって爆発していく。外周の遠距離型を狙った主砲のビームもまた上方に狙いを逸らし、遠く離れたビルに命中してかすかな爆発音を轟かせた。
「くそっ……ジャミングだ！」
由仁子が舌打ちして叫び、本能的に黄の王の姿を見るが、彼が必殺技を使用している気配はない。
「レディオの奴じゃねぇ……手下の黄色のどいつかだ！　探せ！」
「わ……わかった！」
答えると同時にハルユキは羽を広げ、強く地面を蹴って飛び上がった――その時。
「≪エレクトリック・セラピー≫!!」
何者かの技名発声と共に地上から伸びてきた二本のワイヤーがハルユキの両足首に巻きつき、そのまま地面に叩きつける。
衝撃に息を詰まらせながらも、ハルユキは手刀でワイヤーを切断しようとするが。
「っ……!?」
全身に走る激しいショックにハルユキの身体は硬直する。見れば離れたところで両腕からワイヤーを伸ばすメカニカルなアバターが、背負ったトランスのような装置を盛んにスパークさせている。
スタン効果が主の攻撃らしくダメージはほとんどないが、身体が思うように動かせず、足首のワイヤーを振りほどくことができない。
「ぐ……う……！」
呻くハルユキに、発電アバターが甲高い哄笑を浴びせてきた。
「きひひひ！　しばらくそこで寝てろや小僧！　あの小娘が全身ひん剥かれるまでなぁ！」
その言葉通り、由仁子の要塞型アバターに向かって飛び掛っていく

複数の近接型の姿が見えた。砲の死角に回り込むや、強化外装の接合部に拳や蹴りを浴びせ始める。
「うっしゃあ！　あのスカーレット・レインだってこんなモンだぜ！　お前ら、皮全部剥いてあのガキ引き摺り出せっ!!　何度もぶっ殺して最後の一ポイントまで奪って辱めろ！」
「ぐっ、この離しやがれぇ!!!!」
由仁子が残存武装を一斉に発射するが、全てジャミングにより虚しい爆発音を響かせるだけに留まった。
そんなスカーレット・レインを見て、抑揚豊かな笑いが高らかに響き渡る。
「ははは！　ははははははは!!」
黄の王イエロー・レディオはその細い長身をゆらゆら揺らし、喜悦に身を捩る。
「なんと無様で、なんと滑稽な姿だ！　これが赤の軍団（プロミネンス）のNo.２というのですから拍子抜けもいいところです！　所詮は純色ではない出来損ないの王の配下は出来損ないという訳ですかね！」
容赦のない侮蔑の言葉に由仁子は怒気を孕んだ言葉をぶつける。
「あたしのことはなんとでも言うがいいさ。けどあの人を侮蔑する言葉は許さねぇぞ！　取り消せ!!」
「その状態でよくそんな口を聞けたものですねぇ。もはやあなたの命は風前の灯だというのに」
そしてイエロー・レディオは地面に横たわる黒雪姫を舌なめずりするように見回す。
「さて、敵の無力化も成功したところで私はメインデッシュといかせていただきますか。食欲はそそらない色ではありますがね！」
ははは、と嗤いながら、イエロー・レディオは悠然と歩を進め始める。
――このままじゃ先輩が……先輩が！
「くっ……そぉ……！」
ハルユキはがむしゃらに身体を動かそうとするが、それは意志だけで、身体は微塵たりとも動いてはくれない。

こんなところで終わってしまうのか。こんなところで。
加速世界の最果てを終焉（エンディング）を目指す戦いは、まだ始まったばかりだというのに。
こんなところで――。
「せ……せんぱい――――!!!!」
ハルユキの絶叫が辺りに響いたその時。
「悪いわね、レディオ。その女の首は私のモノなの。だからアナタは――消えてくれる？」
戦場にどこか妖艶でありながらも王の威厳に満ちた、女性の声が響き渡り。
どこからともなく現れた紅蓮の炎に包まれた不死鳥が高らかに嘶き――黄の王の身体を包み込んだ。